

四柳白山下遺跡Ⅰ



「田地八十」記載墨書土器 径11.9cm

1990

羽咋市教育委員会

四柳白山下遺跡Ⅰ

1990

羽咋市教育委員会



①検出されたSB01～03(北から)



②掘りあがったSB01～03(北から)

四柳白山下遺跡発掘調査報告書Ⅰ

目 次

例 言	V
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 古代における遺跡周辺の状況	1
第2章 調査に至る経緯と経過	7
第1節 遺跡の発見と分布調査	7
第2節 調査に至る経緯	8
第3節 調査の経過（日誌抄）	9
第3章 第1次調査の概要	11
第1節 第1次調査区の設定	11
第2節 土層の概要	12
第4章 遺構と遺物	14
第1節 各 説	14
1 畝状遺構〔SU01～13〕	14
2 掘立柱建物〔SB01～03〕	18
3 柱 列〔SA01・02〕	23
4 土 坑〔SK01〕	26
5 配石遺構〔SX01〕	27
第5章 遺 物	28
第1節 古代の遺物	28
1 須恵器	28
2 円面硯	40
3 土師器	40
4 その他の遺物	44
第2節 中世から近世の遺物	45
第6章 調査の成果と課題	48
第1節 遺構と遺物の時期	48
第2節 墨書土器の概要	49
第3節 掘立柱建物の類型	50
第4節 まとめに代えて	51

図 版 目 次

巻頭図版 (1)検出されたSB01～03(北から) (2)掘りあがったSB01～03(北から)

本文対照頁

図 版 1	遺跡周辺の航空写真(昭和22年撮影).....	1
図 版 2	(1)遺跡遠景(北から) (2)バックホーによる荒掘り(東から).....	11
図 版 3	(1)調査風景(南から) (2)畝状溝掘り下げ作業(南から).....	12
図 版 4	(1)掘りあがった畝状溝(北から) (2)掘りあがった畝状溝(南から).....	14
図 版 5	(1)掘りあがったSU10(南から) (2)SU10内土器検出状況(東から).....	14～18
図 版 6	(1)調査区全体遺構検出状況(南から) (2)調査区全体遺構検出状況(北から).....	19
図 版 7	(1)掘りあがった調査区全景(南から) (2)掘りあがった調査区全景(北から).....	19
図 版 8	(1)掘りあがったSB01～03(東から) (2)SB01・02柱穴切り合い状況(北から).....	18～23
図 版 9	(1)柱根が残る柱列(北から) (2)柱根検出状況(南から).....	18～23
図 版 10	(1)SK01・SX01検出状況(南から) (2)掘りあがったSK01(北から).....	26・27
図 版 11	SU01～13出土土器(第7・9図).....	14～18
図 版 12	SU01～13出土土器(上-第9図)、SB01・02柱穴内出土土器(下-第10図).....	14～23
図 版 13	SK01出土土器(第16図).....	26・27
図 版 14	須恵器(第18図).....	28～40
図 版 15	須恵器(第18図).....	28～40
図 版 16	須恵器(第18・19図).....	28～40
図 版 17	須恵器(第19・20図).....	28～40
図 版 18	須恵器(第20図).....	28～40
図 版 19	須恵器(第21図).....	28～40
図 版 20	須恵器(第21・22図).....	28～40
図 版 21	須恵器(第22・23図).....	28～40
図 版 22	須恵器(第23・24図).....	28～40
図 版 23	土師器(第25・26図).....	40～44
図 版 24	土師器(第27図).....	40～44
図 版 25	陶磁器(第29・30図).....	45～47
図 版 26	陶磁器(上-第30図)、その他の遺物(第13・14・17・27・28図).....	18～47
図 版 27	墨書文字 1.....	49～50
図 版 28	墨書文字 2.....	49～50

表 目 次

頁

第1表	周辺遺跡地名表1	5
第2表	周辺遺跡地名表2	6
第3表	土層分類表	13
第4表	掘立柱建物計測表	21・22
第5表	須恵器坏蓋・標準得点による分布	28
第6表	須恵器有台坏・主成分分析による二次元散布	34
第7表	須恵器無台坏・主成分分析による二次元散布	36
第8表	墨書土器集計表	49
第9表	建物・主成分分析による二次元散布	50
第10表	出土土器観察表1	53
第11表	出土土器観察表2	54
第12表	出土土器観察表3	55
第13表	出土土器観察表4	56
第14表	出土土器観察表5	57
第15表	出土土器観察表6	58
第16表	出土土器観察表7	59

挿 図 目 次

	頁
第1図 位置と地形概念図(縮尺580,000分の1)	1
第2図 採集調査土器実測図(縮尺3分の1)	2
第3図 四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図(縮尺25,000分の1)	4
第4図 分布調査トレンチ位置図(縮尺1,200分の1)	7
第5図 第1次調査区グリッド割図(縮尺500分の1)	11
第6図 調査区土層断面図(縮尺80分の1)	13
第7図 SU01～13出土土器実測図1(縮尺3分の1)	14
第8図 調査区全体図1(縮尺80分の1)	15
第9図 SU01～13出土土器実測図2(縮尺3分の1)	17
第10図 SB01・02柱穴内出土土器実測図(縮尺3分の1)	18
第11図 調査区全体図2(縮尺80分の1)	19
第12図 SB01～03平面及び断面図(縮尺80分の1)	21・22
第13図 SB02柱根実測図1(縮尺3分の1)	24
第14図 SB02柱根実測図2(縮尺3分の1)	25
第15図 SK01実測図(縮尺60分の1)	26
第16図 SK01出土土器実測図(縮尺3分の1)	26
第17図 礫石実測図(縮尺3分の1)	27
第18図 須恵器実測図1(縮尺3分の1)	29
第19図 須恵器実測図2(縮尺3分の1)	30
第20図 須恵器実測図3(縮尺3分の1)	31
第21図 須恵器実測図4(縮尺3分の1)	33
第22図 須恵器実測図5(縮尺3分の1)	35
第23図 須恵器実測図6(縮尺3分の1)	37
第24図 須恵器実測図7(縮尺3分の1)	39
第25図 土師器実測図1(縮尺3分の1)	41
第26図 土師器実測図2(縮尺3分の1)	42
第27図 土師器実測図3(縮尺3分の1)	43
第28図 木製品実測図(縮尺3分の1)	44
第29図 陶磁器実測図1(縮尺3分の1)	46
第30図 陶磁器実測図2(縮尺3分の1)	47
第31図 柱穴内土器出土地点図	48
第32図 遺跡の位置概念図(縮尺290,000分の1)	51

例 言

1. 本書は、石川県羽咋市四柳町に所在する「四柳白山下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、個人住宅建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は国庫及び県費の補助による。
3. 調査は、羽咋市教育委員会社会教育課主事谷内碩央・同主事今井淳一が担当した。また、庶務は同係長小原慎哉があたった。
4. 試掘調査は平成元年1月18日・25日の延べ2日間、本調査は平成元年4月10日から6月2日まで延べ33日間を要した。
5. 出土遺物整理作業及び報告書作成作業は、平成元年6月から平成2年3月までの関連時に実施した。
6. 出土遺物の整理にあたっては、遺物洗浄・接合・記名作業を能山真登加・楠 みち子・森 志津・永原とき子、遺物実測・トレース作業を能山・楠・森、図版作成を今井淳一、写真撮影を谷内碩央がそれぞれ分担した。
7. 本書の執筆・編集は今井淳一が行った。
8. 遺構・遺物挿図の指示は下記のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
 - (2) 方位はすべて磁北を表している。
 - (3) 水平基準は海拔高を示している。
 - (4) 写真図版の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
 - (5) 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
 - (6) 遺構名の略号は次のとおりである。
 柱列〔SA〕、掘立柱建物〔SB〕、土坑〔SK〕、欹伏溝〔SU〕
 その他の遺構〔SX〕
9. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあっている。
10. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関から、御指導・御協力を賜った。以下に御芳名を記して厚く御礼を申し上げます。（敬称略・順不同）
 浜岡賢太郎 小嶋 芳孝 垣内 光次郎 北野 博司 木立 雅朗 川畑 誠
 石川県教育委員会 石川県立埋蔵文化財センター 石川県埋蔵文化財保存協会
 建設省北陸地方建設局金沢工事事務所 羽咋市歴史民俗資料館 四柳町町会
 羽咋産業建設株式会社 上田石油株式会社 セントラル航業株式会社

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境



第1図 位置と地形概念図 (1/580,000)

能登半島の基部西側に位置する羽咋市域の地形は、南東部の碓石ヶ峰山地と北西部の眉丈山地、これらの山地に挟まれた低地のいわゆる邑知地溝帯、そして日本海と接する海岸に発達した羽咋砂丘とに大きく区分される。

山丘で覆われた半島のなかで、邑知地溝帯は羽咋市から七尾市にかけて走る大きな帯状の平野部であり、弥生時代から現代にいたるまで半島随一の穀倉地帯である。そ

の規模は長さ約20km、幅は北東の七尾付近で狭く、南西方向に向かって次第に広がり、羽咋付近では4km以上を測る。また、地溝帯内では、急峻な断層崖をなす南東側の山系から流れ出る中小河川がいくつもの扇状地を作り出し、北西側へと緩やかに傾斜している。

四柳白山下遺跡はこの南東側山麓域にあたる羽咋市四柳町地内に所在し、碓石ヶ峰山地を開析して流れる地獄谷川によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。標高は15～18mを測り、伏流水の湧水が激しい所となっている。

一方、邑知地溝帯の南西部である本市域のほぼ中央には、典型的海跡湖として県下では河北潟に次ぐ湖沼であった邑知潟が所在していた。現在では国営干拓事業（昭和23年度～昭和43年度）などによって水田地帯と化しており、わずかに残る86haの遊水池にかつての面影を残しているに過ぎない。

しかし、本遺跡の南東約100m、標高30～40mの段丘上に立地する四柳貝塚⁽¹⁾からは、ヤマトシジミだけの貝層が確認されており、縄文時代中期には少なくともこのあたりまでは汽水性の湖岸線が達していたと想定される。

本遺跡は、日本海に大きく突き出た能登半島の基部を横断する邑知地溝帯の東縁で、かつ古代の良好な港であった旧邑知潟北東岸にあたる扇伏地上に展開している。

第2節 古代における遺跡周辺の状況

四柳白山下遺跡が所在する羽咋市四柳町周辺は、古代の行政区画では、『和名類聚抄』記載の能登国能登郡と木郷に比定される地域である。

能登国のなかで能登郡は、そのほぼ中央部を郡域とし、九郷で構成されている。そのなかで与木郷は郡の南西端に位置しており、そのまま邑知地溝帯を二分していた羽咋郡と旧邑知潟北東岸付近で接する地域にあたっている。

この郷名については、平城宮跡から出土した和銅6年(713)の唐米六斗の付札に「越前国能登郡^{よき}翼^{はね}寄里」と記されているのが初見であり、この木簡によって7世紀末より実施された律令体制初期の段階には越前国に属しながらも、既に地方行政組織の末端区画として編成されていたことがうかがわれる。

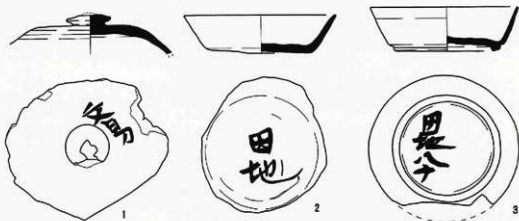
能登国全体としては、養老2年(718)に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分離独立したにもかかわらず、天平13年(741)には越中国に併合され、天平勝宝9年(757)に再び分立するという経緯をたどっているが、いずれの措置も地域の実態に即したのではなく、東北日本への支配拡大のためであったり、藤原仲麻呂政権の確立といった政局の転換によるものであったとみられている。⁽²⁾

こうした極めて集権性の強い律令体制のなかでは、在地である能登の情勢を伝える文字史料は少ないと言わざるを得ない。しかし、与木郷は逆にこの体制を維持するための古代の交通制度である「駅制」の存在によって地域史の解明に欠かせぬ素材を提供しているといえる。

「駅制」とは全国を畿内と七道に分け、すべての道を都へと通じさせ、各道には乗り継ぎ用の馬を備えた駅を設けた古代の交通網であり、最近の調査で検出された山陽道や西海道の道跡などは幅10m前後と広く、車が使用されるほど直線的で舗装されていたことが判明している。⁽³⁾

『延喜式』や前出『和名類聚抄』には、北陸道の駅として加賀国横山駅の次に能登国撰才駅が、続いて国府の近くの越蘇駅があげられており、駅名と郷名との結び付きから与木郷域内にその場所が比定されている。

また、本遺跡の北400mに鎮座する御門主比古神社(羽咋市大町)と同社に合祀されている余喜比古神社は、前出『延喜式』の神名帳に能登郡十七座の神々として登載されている。両社ともに古代における在地の有力神であり、御門主比古神社については七尾市鶴浦町に論社があるが、余喜比古神社はその名称からも、もとは撰才駅があったとされる現在の四柳町あるいは大町周辺に鎮座していたと考えられている。



第2図 採集墨書土器実測図(1/3)

こうした、文献史料としての採穴駅や余喜比古神社に加え、昭和23年の耕地整理の際、四柳町在住の西飯弥一氏が遺跡周辺で採集された第2図掲載の墨書土器の存在は、本遺跡周辺が旧邑知瀧北東岸にあって豊かな生産基盤を擁し、邑知地溝帯南東側山麓に設定された古代の官道ルートあるいは湖上交通の中継点として開発が早かったことを示唆していると言えよう。

次に与木郷を含む邑知地溝帯内での古代の主な遺跡を概観しておきたい。

まず、地溝帯南西端にあたる羽咋郡域で、旧邑知瀧南岸に所在する長者川遺跡からは8世紀代を示す「生」「大」「口島家」などの墨書土器9点が採集されており、未調査ではあるが羽咋郡衙との関係が注目されている。

また、本遺跡の南西約8km、旧邑知瀧と日本海を結ぶ川のほとりには、羽咋砂丘上に寺家遺跡⁽⁵⁾が所在している。ここでは古代を三つの画期で区分する大規模な建物群や祭祀遺跡が検出されており、その北方の段丘上に鎮座する能登一宮・気多神社の歴史的な変遷を具体的に知ることができる。出土した祭祀行為に關係する豊富な資料や299点の墨書土器などもひととききわ目だつものであり、律令体制下での渤海交渉に関わってきた気多神社の隆盛ぶりがうかがわれる。

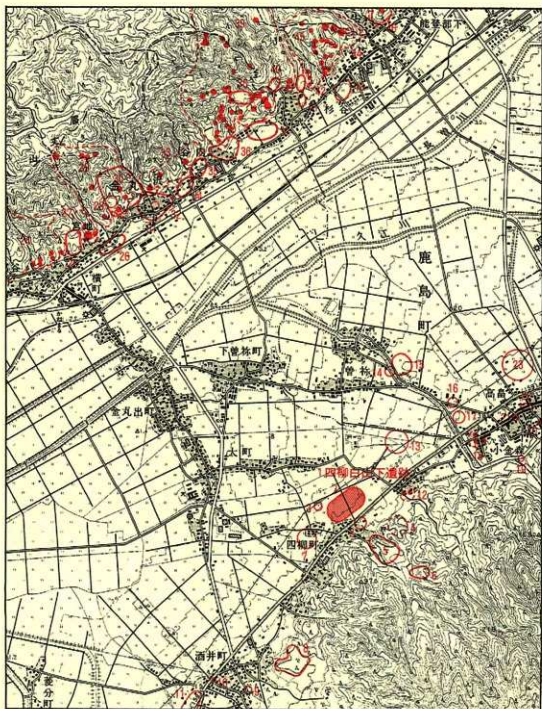
加えて、同神社の南の台地上では、奈良時代に入って三重塔を含むシャコデ廃寺が創建されており、本遺跡の主体期でもある8世紀前半には気多神が能登の重要な神として組織的に信仰され始めたことが明らかになっている。

続いて能登郡域では、本遺跡の北東約7kmの扇状地上に徳前C遺跡⁽⁶⁾が所在しており、これも8世紀前半の規格性をもった掘立柱建物8棟と井戸跡1基が検出されている。

さらに、本遺跡から約14km離れた邑知地溝帯北東端、能登国府所在比定地周辺には、能登国分寺跡⁽⁷⁾、同尼寺とされる千野庵寺跡、15棟以上の掘立柱建物を検出した古府タブノキダ遺跡⁽⁸⁾や小池川原地区遺跡などの主要な遺跡が所在しており、至近距離にある越前駅や鹿嶋津を含めて古代能登の政治的中枢を形成してきたことが知られる。

以上、古代の邑知地溝帯内での本遺跡周辺は、地溝帯の両端に分化したそれぞれの拠点の間接点に位置しており、これまでに述べてきた地理的要因が交通の要衝としての先進性と漸進性をもたらしてきたと思われる。

- 註 (1) 高橋 勝喜「羽咋の縄文遺跡」、『羽咋市史』原系・古代編 1973 羽咋市
 (2) 浅香 年木「古代の上日郷と石動山」、『鹿島町史』通史・民俗編 1985 鹿島町
 (3) 高橋美久二「情報を知するものは」、『古代史復元』9・金子 裕之編 講談社 1989 東京
 (4) 浅野 幸雄「長者川遺跡」、『羽咋市史』原始・古代編 1973 羽咋市
 (5) 小嶋 芳孝「寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ」、『石川県立歴史文化財センター』1986・1988 金沢市
 (6) 湯沢 修平「徳前C遺跡」、『鹿島町史』資料編(続) 1982 鹿島町
 (7) 土肥富士夫・木立 雅明・清水 宣義・曹雄 直・平川 南「史跡 能登国分寺跡」七尾市教育委員会 1989 七尾市
 (8) 堀田 修寛・宮下 栄仁・横本 澄夫「七尾市古府タブノキダ遺跡」石川県立歴史文化財センター 1983 金沢市



第3図 四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

500 m 0 500 1000

第1表 周辺遺跡地名表1

No.	名 称	所 在 地	種別	時代	出 土 品	備 考
1	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	包含地	奈良	須恵器・土師器多数、 墨書土器 22点、円面硯	一部平成元年、羽咋市教 委、発掘調査
2	四柳貝塚	＊ ＊	貝 塚	縄 文	土器片50、石器（石匙1、 石鏃3、磨製石斧1、石 斧3）	
3	四柳宮の越古銭遺跡	＊ ＊	包含地	不 詳	珠洲焼カメ（宋、明銭36 貫）	通称名は「倉ノ腰」
4	四柳1号横穴	＊ ＊	古 墳	古 墳		7号までであるとのことだ であるが2号から7号未確 認
5	四柳中の堂遺跡	＊ ＊	包含地	＊	壺、高坏、器台、埴、台 付埴、土師等20	
6	大町中世墓群	＊ 大町 （オハカ）	墳 墓	不 詳	板碑、五輪塔多数（下よ り四耳臺2）	
7	四柳やちだ遺跡	＊ 四柳町	包含地	＊	壺、高坏、器台	
8	酒井東古墳	＊ 酒井町	古 墳	古 墳		2基以上
9	酒井中世墓	＊ ＊	墳 墓	不 詳	五輪塔、板碑	
10	酒井古墳	＊ ＊	古 墳	古 墳		横穴式石室
11	酒井国道遺跡	＊ ＊	包含地	＊	高坏脚部3	
12	大町1号横穴	＊ 大町上野 （オハカノ上）	古 墳	＊		
	＊ 2号 ＊	＊ ＊	＊	＊		
13	大町なつだ遺跡	＊ ＊	包含地	不 詳	長頸壺1、破片	（地点不明）
14	曾祿遺跡（A）	鹿島町曾祿	＊	弥 生	土器	昭36耕地整理により発見
15	曾祿弥生遺跡	＊ ＊ （道田の池）	＊	＊	壺、高坏、土器	昭34 ＊
16	小金森仏教遺跡	＊ 小金森	＊	鎌 倉	鏡	耕地整理により出土
17	曾祿遺跡（B）	＊ 曾祿	＊	古 墳	平瓶、甕	耕地整理により発見
18	曾祿1号古墳	＊ ＊	古 墳	古 墳 後 期	壺坏、台付長頸壺、埴、 壺、環頸大刀	明41山道家新築により発 見、消滅、円墳、横穴式 石室
	＊ 2号 ＊	＊ ＊	＊	古 墳		円墳径約7m、高0.5m
	＊ 3号 ＊	＊ ＊	＊	＊		円墳径約5m、高1.5m 周は削られ、原形より小 型化
19	高島ケカッチョ遺跡	＊ 高島 （ケカッチョ）	包含地	縄 文	磨製石斧	
20	高島経塚古墳	＊ ＊	古 墳	古 墳 後 期	坏、主頸大刀、埴、刀、 高坏	円墳、横穴式石室、径10 m 水口家新築の際発見 消滅
21	高島稲荷社跡遺跡	＊ ＊	包含地	古 墳		
22	高島弥生遺跡	＊ ＊ （キクヤ小路）	＊	弥 生 後 期	壺	
23	高島遺跡	＊ ＊	＊	古 墳	埴、小形丸庭埴、壺、高 坏	昭35耕地整理により発見
24	正部谷古墳群	鹿西町正部谷	古 墳	古 墳		円墳10基以上

第2表 周辺遺跡地名表2

No.	名 称	所 在 地	種別	時代	出 土 品	備 考
25	生国玉比古神社横遺跡	鹿西町金丸宮地 (カナマリツカ)	包含地	中 世	土師器	
26	金丸宮地遺跡	＊ ＊ ＊	＊	古 墳	壺、高坏	
	＊	＊ ＊ ＊	＊	奈 良	坏皿、須恵器、長頸瓶	
27	金丸鳥屋塚古墳	＊ ＊ ＊	古 墳	古 墳		横穴式石室（両袖式）
28	仏性山天平寺跡	＊ 金丸沢	寺院跡	鎌 倉		
29	沢古墳群	＊ ＊ ＊	古 墳	古 墳		円墳8、方墳1基以上
30	金丸城跡	＊ ＊ ＊	城 跡	鎌 倉		
31	金丸地頭館跡	＊ ＊ ＊	館 跡			
32	専願寺跡	＊ ＊ ＊	寺院跡	鎌 倉 室 町		
33	谷内古墳群	＊ 金丸谷内	古 墳	古 墳		円墳3基以上
34	沢遺跡	＊ ＊ ＊ 沢	包含地	奈良・ 平 安	土師器、須恵器	
35	谷内コショウジ遺跡	＊ ＊ ＊ 谷内 (コショウジ)	＊	＊	＊	
36	谷内ブンガヤチ遺跡	＊ ＊ ＊ ＊ (ブンガヤチ)	＊	＊	須恵器	
37	金丸杉谷川遺跡	＊ ＊ ＊ 杉谷	包含地	平 安	土師壺、須恵坏、隆平永 宝11枚	耕地整理中出土
38	金丸杉谷古墳	＊ ＊ ＊ ＊	古 墳	古 墳	提瓶	盗掘のあとがある
39	杉谷古墳群	＊ ＊ ＊ ＊	＊	＊	鉄鍬	一部、昭和61、62年石川 県立埋蔵文化財センター 発掘調査
40	金丸杉谷川遺跡	＊ ＊ ＊ ＊	包含地	弥 生	石鏃	杉谷川より採集
41	杉谷ヒガシ遺跡	＊ ＊ ＊ ＊ (ヒガシ)	＊	不 詳		
42	杉谷遺跡	＊ ＊ ＊ ＊ (コトミ、セチ シンカイ)	＊	＊		
43	杉谷ヤサカ遺跡	＊ ＊ ＊ ＊ (ヤサカ)	＊	＊		
44	能登部下遺跡	＊ 能登部下	＊	縄 文	磨製石斧	
	＊	＊ ＊ ＊	＊	古 墳	埴形土器、壺	
45	能登部姫塚1号古墳	＊ ＊ ＊ (ミササギ山)	古 墳	古 墳	須恵器、玉	径27m、高さ4.5m
	＊ 2号 ＊	＊ ＊ ＊ (＊)	＊	＊		径18m、高さ2.5m
	＊ 3号 ＊	＊ ＊ ＊ (＊)	＊	＊		径22m、高さ3m
46	能登部城跡	＊ ＊ ＊	城 跡	鎌 倉		

第2章 調査に至る経緯と経過

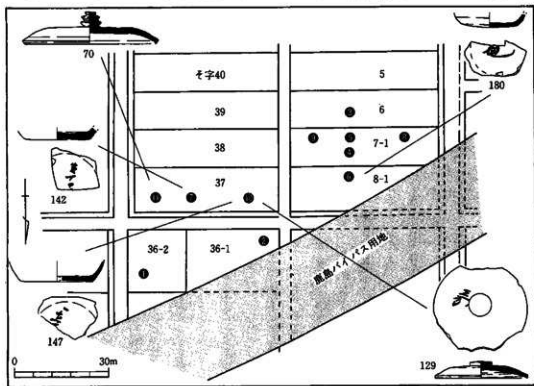
第1節 遺跡の発見と分布調査

平成元年1月17日、上田石油株式会社（以下：上田石油）より鹿島バイパス予定地に隣接する羽咋市四柳町字6・7-1・8-1・36-1・36-2・37番地の現況地目田に対して、個人住宅及び給油所建築を目的とした開発計画が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

これを受けた市教委では、開発の規模（約3,000㎡）と周囲に四柳貝塚（第3図No2）四柳宮の越古銭遺跡（第3図No3）が所在する点などから、同年1月18日、開発予定地にバックホーで計7カ所（試掘面積合計70㎡）の試掘孔を設ける形で埋蔵文化財の分布調査を行った。

その結果、第4図に示したように最も低地にあたる第1・2トレンチでは遺物包含層を確認できなかったものの、残りのトレンチでは良好な遺存状態を保つ包含層が認められた。また、その際出土した墨書土器を含む須恵器・土師器などの遺物により、この開発予定地内に既に知られている周辺の遺跡とは時代が異なる新たな遺跡であることも同時に判明した。

ただちに上田石油側と発掘調査に関する協議に入っていた市教委は、25日に二度目の分布調査を行った。これは前回の分布調査が高低差のある南北方向を中心に包含層の有無を確認したのに対して、第5・7トレンチを基にそれぞれ東西方向に遺跡としての包含層の広がりを再確認するためのものであった。前回同様バックホーで4カ所（試掘面積合計106㎡）の試掘孔を



第4図 分布調査トレンチ位置図 (1/1,200)

設け断面観察を行った結果、包含層は第5から第8 トレンチへ向かうにつれて薄くなり、最も西側では層序の変化が認められたが、全体としては広範囲にわたる遺跡の存在を確認した。

第2節 調査に至る経緯

調査の直接原因である開発計画は、鹿島バイパス建設に伴うバイパス用地内からの既存の住宅及び給油所移転によって生じている。この移転問題と埋蔵文化財の問題が当初別々に存在していたことによって、調査の経緯はやや複雑であった。

- 1月19日 隣接のバイパス予定地にも遺跡の広がりが見込まれるため、第1回の分布調査結果をもとに、石川県立埋蔵文化財センター(以下：埋文センター)において、今後の発掘調査に関する取扱いについて協議を行う。同席上、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(以下：建設省)と連絡を取り、上田石油の既存の住宅に関しては既に建設省と移転契約が締結されており、来年中に移転を完了しなければならないこと。また、給油所に関しては未契約である旨を再確認する。その後、埋文センターでの話しを受けた形で市教委内の協議を行い、時間的制約のある個人住宅に重点を置いて調整に臨むことを決定する。
- 1月24日 建設省金沢事務所において、建設省・埋文センター・市教委間の経過説明及び発掘調査に関する協議を行う。
- 1月25日 二度目の分布調査によって遺跡の範囲を確認。
- 1月26日 埋文センターでこれまでの経過説明を行う。
- 1月31日 石川県教育委員会文化課(以下：県教委)において26日までの経過説明及び個人住宅部分の発掘調査に係る費用の捻出について協議。原因者負担の軽減をはかるため個人住宅部分の発掘調査費用に関する積算書を作成するよう指導を受ける。
- 2月7日 羽咋市役所において、建設省・市建設課・市教委間の協議。市教委からは分布調査の経過と発掘調査の必要性についての説明を行い、建設省側はバイパス建設に関する用地買収の現状を説明してもらう。協議後、建設省は上田石油へ。
- 2月9日 県教委との間で、個人住宅建設に伴う発掘調査の調整・協議を行う。
- 2月16日 上田石油側との協議。給油所予定地についても引き続き発掘調査の調整を行う。
- 3月15日 上田石油及び四柳町町会長宅へ赴き、市教委による4月からの発掘調査の確認と調査作業員の斡旋依頼を行う。

以上の経緯を経て、個人住宅部分の発掘調査は4月10日から6月2日まで延べ33日間にわたって実施した。今回の調査は開発計画を受けた段階から常に時間的な制約を受けながらのものであり、開発の計画段階での十分な協議・調整を痛感させられた調査であった。また、上田石油側からすれば、ようやく移転用地を確保した矢先の思いもかけぬ遺跡の発見であり、計画の大幅な変更等ずいぶんご迷惑をおかけした。それにもかかわらず、埋蔵文化財への理解を示され終始協力下されたことに対して、敬意と感謝の意を申し述べておきたい。

第3節 調査の経過（日誌抄）

4月10日（明） 曇り

本日より現地調査開始。住宅の計画図面を基に調査区域を設定。バックホーによる荒掘りを行う。

4月11日（火） 晴一時雨

荒掘り作業と同時に発掘用機材を運び込む。

4月12日（水） 曇り一時雨

発掘調査員によってベルトコンベアーを設置し調査区全域の第4層の掘り下げ作業を行う。
バイパス予定地のセンター杭を基準にグリッドを設定する。

4月13日（木） 晴

第4層及び第5層の掘り下げ作業を行う。

4月14日（金） 晴

J～H区間の第5層の掘り下げ作業を行う。墨書土器が2片出土する。

4月17日（月） 曇り

バックホーによる排土の除去作業に加え、湧き水の多い地帯なので、水はけ用の溝を設ける。

4月18日（火） 曇り

第5層の掘り下げ作業の結果、南北方向に走る溝状遺構を数条検出。

4月19日（水） 晴

溝条遺構の平面図取りとレベル記入を行った後調査区全体の整理清掃作業、写真撮影を行う。

4月20日（木） 晴

第6層の掘り下げ作業に入る。J～I区間で粘土面の広がりを、F～H区間で新たな溝状遺構を確認する。

4月21日（金） 晴

遺構検出作業及び写真撮影。新たに検出した溝状遺構の平面図取りとレベル記入を行う。

4月26日（火） 晴

調査区全域で第6層の掘り下げ作業を行う。G～F区間でも溝の続きを確認。余喜公民館山岸主事他1名来跡。

4月27日（水） 曇り後雨

第6層の掘り下げを続行。発掘面が乾燥のため固い。聞き取りの結果、調査区周辺の通称が白山下と判明。遺跡名を四柳白山下遺跡とする。

（社）埋文保存協会山本・藤田氏他1名来跡

4月28日（木） 晴

第6層の掘り下げ作業を続行。



4/12 調査前の供養



4/18 遺構検出作業



4/19 検出した畝状溝を掘る



5/16 小学生の遺跡見学

- 5月1日 雨～9日 雨 晴（内作業4日）
第6層の掘り下げ作業を続行。
- 5月10日 雨 曇り
北側壁面の配石周辺及び粘土面土坑の整理作業と写真撮影を行う。第6層の掘り下げも続行。
- 5月12日 雨 小雨
I3区内で溝内のまとまった土器群を検出。10号溝とする。
- 5月15日 雨 晴
10号溝の掘り下げ作業と平面図取り及びF～H区間の遺構検出作業を行う。
- 5月16日 雨 晴
調査区壁面の整理作業及び全体の写真撮影を行う。
金沢市浅ノ町小学校70名遺跡見学。
- 5月17日 雨 曇り
遺構検出作業で掘立柱建物の柱穴と思われる遺構がいくつか認められる。
- 5月18日 雨 晴
調査区全域の遺構検出作業を続行。二間×三間の掘立柱建物を検出。
- 5月19日 雨 曇り
精査の結果、ほぼ同一面で三つに重なり合う建物跡であることが判明。検出時の全体写真撮影を行う。1～3号建物と呼称する。
- 5月22日 雨 晴
検出遺構の掘り下げ（半掘）作業を行う。
- 5月23日 雨 晴
平面図取りとレベル記入作業。2号建物柱穴に柱根の残存を確認。
- 5月24日 雨・25 雨 晴
各遺構の全掘作業と建物間の切り合い関係を確認。
清掃作業の後、全体の写真撮影。
- 5月30日 雨 晴
各遺構の平面図取り及び配石のレベル記入。市文化財保護審議会現地視察。
- 6月1日 雨 晴
各遺構のレベル記入の後、地元の人達を対象に現地説明会を開催。50名参加。
- 6月2日 雨 晴
発掘機材撤収。本日をもって現地調査を終了する。



5/19 検出した柱穴を石灰で縁取りする



5/22 規則的に並ぶ建物柱穴を掘る



5/30 取りあげた建物の柱根



6/1 現地説明会

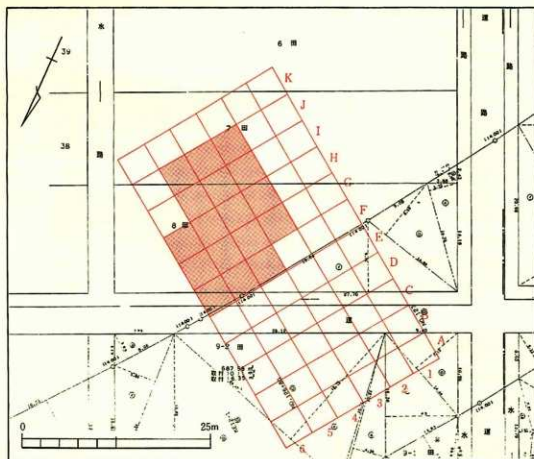
第3章 第1次調査の概要

第1節 第1次調査区の設定

分布調査対象区域において、第1次調査区（個人住宅建設予定地・四柳町そ字6・7-1・8-1番地）にあたる第3～6・9トレンチ周辺を中心として発掘調査を実施した。ただし、周囲が農道と農水路で囲まれていたために区域外となる所が多く、また排土及び湧き水対策もあって、実質調査面積は約200㎡となった。

発掘調査区の設定には、バイパス予定地内のセンター杭（No.126・127）を基準に4m×4m方眼のグリッドを割り付けた。これは調査時点において、第2次調査年度（給油所建設予定地）が未定であり、両調査区を一括資料として扱いやすいように選んだものである。

第5図に示したように、南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を付して呼称している。この座標が交差する点の名称を交点の東北側のグリッド名とした。実際には、まず現地表下約80cmの表土及び第3層面までをバックホーによって除去した後で、グリッド用の杭を打ち込んでおり、第5図網掛け部分が第1次調査地域である。



第5図 第1次調査区グリッド割図 (1/500)

第2節 土層の概要

本遺跡の層序は、基本的に礫や鉄分を含む茶褐色土（第1a層）、礫を含む褐色土（第1b層）、淡青褐色細砂質土（第2層）、黒茶褐色粘質土（第3層）、茶褐色砂質土（第4層）、黄茶灰褐色砂質土（第5層）、黒灰色粘砂質土（第6層）、黄褐色砂質土（第7層・基盤砂層）の順に堆積している。

現在の耕作土である第1a・1b層は投乱気味であり、過去の耕地整理の際に一括して投棄されたと思われる礫石群を部分的に含んでいた。またこの中からは、第28・29図に掲載した中・近世の陶磁器類がほとんど出土しており、断面観察の状況では、次に述べる第3層の遺物包含層中にあったものが削平・投棄の結果、上層まで移動したものと推定される。

第3層の堆積状況は一概ではなく、調査区南端J列でやや厚い層として認められるが、全体的には5～10cm前後の薄いものであった。調査時は湧き水の多さも相まって面的な把握は難しく、遺物包含層としての位置付けしかなかった。しかし、並行して行った聞き取り調査では、調査区周辺の通称名「白山下」は、白山神社のご神体が掘り出された所からの由来であるとされており、その他まわりにも「倉ノ腰」「左近殿（サコダゴ）」「的場」というように、一般の集落ではない生活を連想させる小字名が残っている。

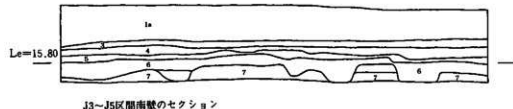
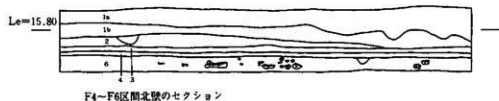
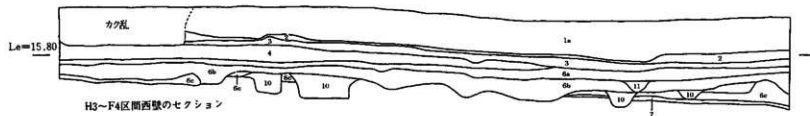
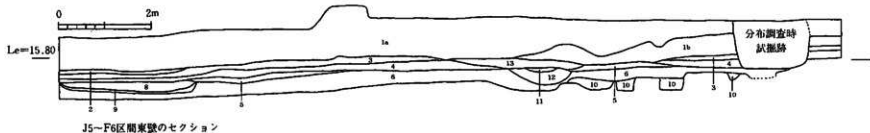
特に、調査区の北西約100mに所在する通称「倉ノ腰」からは昭和15年（1940）大塚に納められた古銭約40貫余りが出土したことが記録に残っており、その近くに井戸跡と考えられる木組みの遺構が土中に現存しているという情報も聞き取りの際に入手できた。現在四柳神社に奉納されている古銭の他は、想像あるいは未確認の範囲であり、今後中・近世の文化層に関しては慎重な対応が必要であろう。

続く砂質層である第4層を挟んで第5・6層は、古代の文化層である。第5層を掘り下げた第6層の上面では13条の南北に走る溝、いわゆる畝状遺構を検出している。（第8図）

黒色系の第6層は、調査区各地点の断面観察によれば、少なくとも上層に暗黒灰色系の粘砂層、下層に明黒灰色系の粘砂層というように細分でき、特に下層ではその上面及び基盤砂層を掘り込む形でいくつもの遺構の落ち込みが認められる。

この面では、掘立柱建物3棟・土坑1基・配石遺構・柱列・小穴を検出しており、（第11図）なかでも掘立柱建物（SB01～03）がほぼ同じ場所で3度建て替えられている事実が判明している。

第6層全体の堆積状況は、調査区の東西方位にあたるJ3～J5区間南壁のセクションで、標高15.8～16.0m、F4～F6区間北壁で標高15.2～15.3mと、それぞれ平均的な厚さ40～50cmでほぼ水平に堆積している。これに対して南北方位にあたるJ5～F6区間東壁のセクションでは南側で標高15.8m、北側で15.3mと約16m間隔で約50～60cmの落差をもって堆積している。H3～F4区間西壁での傾向も同様であり、当時の生活面が邑色地溝帯南東山麓側から地溝帯中央部溝側に向かって緩やかに傾斜する平坦面であったことが復元できる。



第3表 土層分類表

第1a層	茶褐色土（礫、鉄分含む）
第1b層	褐色土（礫含む）
第2層	淡青褐色細砂質土
第3層	黒茶褐色粘質土
第4層	茶褐色砂質土
第5層	黄茶灰褐色砂質土
第6a層	暗黒灰色粘砂質土
第6b層	明黒灰色粘砂質土
第6c層	黒茶灰褐色粘砂質土
第7層	黄褐色砂質土
第8層	暗灰褐色土（炭化物混入）
第9層	淡青灰色粘土（炭化物混入）
第10層	黒灰褐色砂質土
第11層	灰褐色砂質土
第12層	黒灰色、茶褐色混合砂質土

第6図 調査区土層断面図（1/80）

第4章 遺構と遺物

第1節 各 説

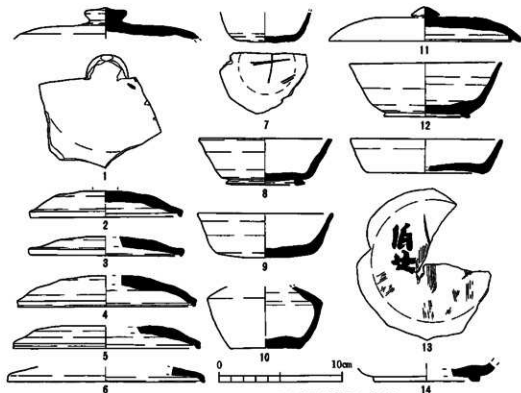
(1) 畝状溝 [SU01～13]

第5層まで掘り下げていくと、調査区全体にわたってほぼ南北に平行する幅20～50cm前後、深さ5～20cm前後の浅い溝が12条走っているのを検出している。遺跡の主体期である古代の包含層（第6層）上面にそれぞれが掘り込まれており、覆土は、ほとんどのものが灰褐色砂層の単一層であった。検出面では途中で途切れたものもみられるが、比較的良好な遺存状態を保っていた調査区東側部分で判断するならば、もともと40cm前後の等間隔で平行して走っていたものと推定される。

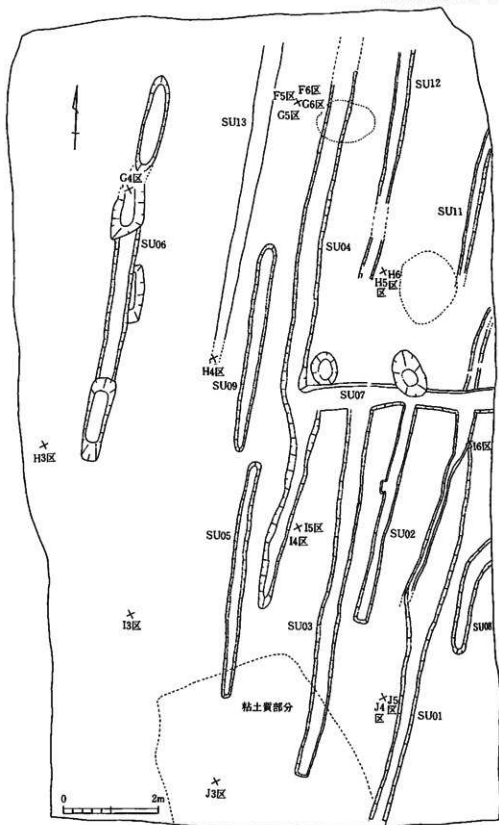
また、1条（SU07）のみではあるが、H5～6区にかけて前述した南北方向を走る溝と直交する形で、東西方向に走る溝を検出している。

覆土中より出土した遺物のなかには、包含層出土のものと接合できる個体が多く、さらに後述する掘立柱建物の建て替えと出土土器の整理により設定した3期にわたる遺跡の変遷期全般を通した遺物が認められる点などから、生活面としての建物などが廃絶したあとに、その方向性を利用してつくられた畑の畝に伴う溝状の遺構であると思われる。

ただ、その中でもH3区北東端からF4区へと流れるSU10の場合、最終的な検出面の標



第7図 SU01～13出土土器実測図1 (1/3)



第8図 調査区全体図1 (1/80)

高が他と比して低く、獨立柱建物などの面と同様であった。さらに、まとまって土器が出土したH3区間での状況を考慮に入れると、初期の段階での建物に伴う雨落溝あるいは区画溝としての性格をもっていた可能性も考えられる。

続いて、SU01～13より出土した土器を一括して報告しておきたい。出土状況は前述したSU10の土器群を除き、調査区全域から多量に出土した包含層のそれと同様であった。

1～6・18・19は須恵器の坏蓋で、形態差及び胎土などにより、後述する各類に分類できる。(第5章参照) SU10の溝底部から出土した19は最も先行的な要素をもつもので、本遺跡第I期に位置付けられる。ヘラ削りを施された天井部外面からなだらかに口縁端部へと移行する扁平気味の笠形で、口縁端部は個性的な断面三角形を呈している。SU05出土の1は逆に最も後出的なⅢ期のもの。扁平な天井部には中央部に突起のある高いボタン形のつまみがつき、同一個体と思われる包含層出土№152から、口縁端部を外屈させる器形であることが知られる。天井部内面には墨書及び墨痕が認められる。墨書は大部分を欠いているため判読は困難である。

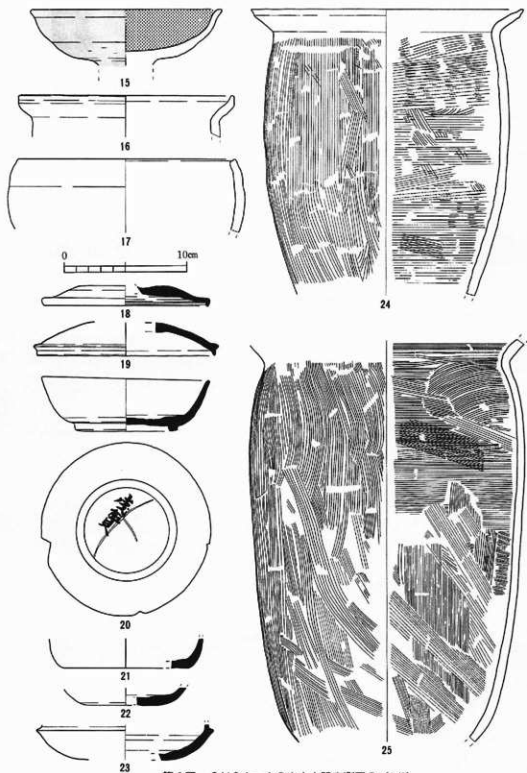
その他の特徴として、2～5・18の内面にも墨痕が残っている点は、本遺跡Ⅱ・Ⅲ期に須恵器坏蓋が転用呪として再使用されることが多かったことを物語っている。

8・14・20は須恵器有台坏。SU09出土の8は胎土・焼成が特に精良、堅緻な一群のひとつで、口径10.8cm、高台径5.5cm、器高3.7cmを測る。底部外面を含め全体に入念な仕上げナデ調整が施されているI期の製品。SU10からはほぼ完全な形で出土した20は口径13.6cm、高台径8.2cm、器高4.2cmを測る。底部外面には「×」印のヘラ書きと、判読できない二文字の墨書が認められる。Ⅱ期の製品。

9・13は須恵器無台坏。9はSU01の出土で、口径11cm、底径7cm、器高3.5cmを測る。2cm前後の砂粒や長石を含む胎土は出土土器全体の傾向と共通だが、焼きの甘い製品でⅢ期に位置付けた。底部と体部の境が丸みをもち、口縁端部がやや肥厚気味に丸く収まる。13はSU06出土で、口径12.2cm、底径9.4cm、器高2.7cmを測る。皿状に近い低平な器形で、薄めの底部から体部が直線的にのびる。色調は淡青灰色を呈し、砂粒・長石を含む胎土・焼成は良好。外面には「一」印のヘラ書きと「酒女」と読める二文字の墨書が記されている。Ⅱ期。

23は今回確認できた須恵器のなかで最も古い形態をとるもので、細部を欠損しているが、坏の立ち上がりが上方ないしやや斜めにのびていたものと推定される。底部外面には回転ヘラ削り、他の部分には回転ナデ調整が施されている。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成は緻密で独特である。

土師器では15・17・24・25がSU10のH3区内からまとまった状態で検出したものである。なかでも24・25の壺はともに底部を欠いてはいるが、ほぼ1個体分の分量が出土している。24は口径21.7cmを測る大形甕で、ヨコナデ調整を施された口縁部は大きく外反し、口唇部外面の斜位の面取りによってやや小さくつまみ出される形態をとる。体部最大径は中位にあり19.6cmを測るが全体の張りは弱い。外面は縦位、内面は横位のハケ調整が施され、胎土には砂粒の他に雲母・海綿骨片を含む。25の体部最大径は22cmで上位にあるが、中位までは計測値の変わらな



第9図 SU01~13出土土器実測図2 (1/3)

い筒形を呈しており、口径も体部径とそう大差のないものになると思われる。体部外面は、縦位あるいは斜位のハケ目、内面は上部が横位で下部が縦位のハケ目調整である。胎土は砂粒と海綿骨片・赤褐色粒を含んでいる。15は内面を黒色処理、外面赤彩を施した高杯の坏部で、口径は15.6cmを測る。皿状を呈し、内湾気味に立ち上がる体部から口縁部が丸みをもつ面をとる。外面はナデ、内面はミガキ調整が施され、胎土には砂粒及び雲母を含む。16はSU06出土で口径17.6cmを測る中形甕の口縁部片。くの字状に外反し、口唇部がさらに上方につまみ出されている。

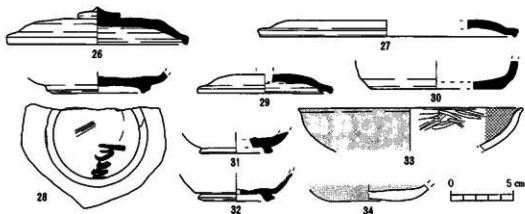
(2) 掘立柱建物〔SB01～03〕

今回の調査で確認できた掘立柱建物は3棟である。(第11・12図) 200㎡弱という非常に狭小な発掘面積であったが、その中央部G～I列グリッド内にそれぞれが重なり合う形で検出となり、多量の土器類の出土とも相まって遺跡の主体期を探索うえで貴重な資料となっている。建物の柱穴については、寺家遺跡の例にない梁間をイロハ列、桁行を123列で呼称した。

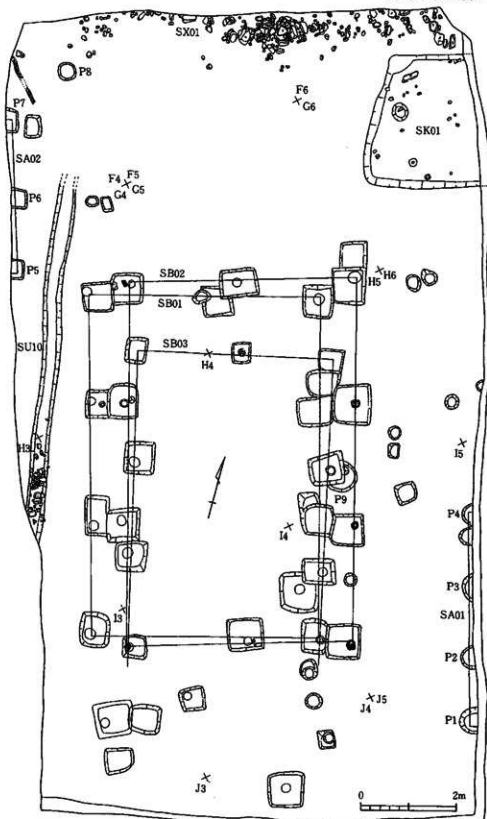
SB01

標高15m前後、2度の角度で南から北へ傾斜する緩斜面上に位置する。梁間2間(4.9m)×桁行3間(7.2m)の規模で、推定床面積は35.28㎡である。建物の主軸はN-16°-Wを測る南北棟で、柱筋、柱間寸法ともに比較的そろっている。

桁行東側柱列で北より230cm、260cm、230cm。梁行は北側柱列で西より260cm、230cmである。柱穴の掘り形は、平均65×65cmの方形である。遺物はすべての柱穴より土師器、須恵器小片を中心に出土しており、6点(第10図26・29・31・32・33・34)を図示した。なかでも26はほとんどの遺物が柱穴の掘り形部分に混在した状態であったのに対し、柱痕部分から完形で出土している点が注目される。色調は酸化焙焼成のため赤茶褐色を呈しているが、形態や成形技法等は一般的な還元焙焼成のそれと同じであり、須恵器坏蓋として扱った。口径14.5cm、器高2.9cm、重量220gを測る。ヘラ削りされた天井部には扁平ではあるが径3.4cmで、中央に突起のあるボタン形つまみがつき、口縁端部が屈曲して垂下する平笠形を呈している。内面全体には墨痕が認められる。本遺跡出土須恵器の坏蓋B2類、変遷期ではⅡ期に属するもので、ロ2柱



第10図 SB01・02柱穴内出土土器実測図 (1/3)



第11図 調査区全体図2 (1/80)

穴の穴底から正位で水平状態のままの出土であった。

29・31・32の須恵器はそれぞれ柱穴イ4・イ2・ハ3の掘り形から出土したもので、色調は青灰色、胎土・焼成は堅緻で精良、割れ口断面内部の酸化層がクリーム色を呈するといった共通性をもっている。29は口径10.9cmを測る坏蓋で内面返りをもつ。外面は降灰を被り、内面は中心部から返りにかけて全面が摩耗によると思われる滑らかな面となっており、部分的にはかすかに墨痕が認められることから転用碗として使用されたものと推定される。高台径5.2cmを測る32の有台坏も高台内面に同様の使用痕と墨痕が認められる。滑らかな面は特に中心部はど顯著であり、ナデ調整痕が消滅している。

33は柱穴イ2出土で、内面を黒色処理、外面赤彩が施されている。口径18cmを測り、口縁端部が短く外反する。ヘラミガキを施された内面の黒色処理は丁寧で、銀色を呈するほどである。34は内外面に赤色顔料を塗布した碗の底部で、隣り合う柱穴イ4・ロ4掘り形からの出土品が接合されたものである。底径6.6cmを測り、残存する底部から体部下半にかけてはヘラ削りが施され、胎土は砂粒・海綿骨片を含んでいる。

その他の柱穴内からの遺物としては、図化できなかったが長軸8.5cm、短軸2.0cm前後を測る木片が焼けた状態で出土している。

SB02

SB01と建物の主軸方位は同じまま、東へ75cm前後平行移動した形で検出された。梁間2間(4.8m)×桁行3間(7.6m)で、推定床面積は36.48㎡と桁行がのびた分だけSB01よりもわずかに大きい規模となっている。桁行東側柱列で北より260cm、250cm、250cm。梁行は北側柱列で西より230cm、250cmとなり、基本的な構造は変わらないと思われる。柱穴の掘り形は平均70×70cmの方形で、柱穴イ1・イ2・イ3・ハ1には柱根をもっていた。(第13・14図)残存する長さ及び幅はイ1が35.4cm、16.4cm、イ2が31cm、15.6cm、イ3が28.9cm、20.6cm、ハ1が38.8cm、16.5cmをそれぞれ測る。いずれも両側面から加工されており、底面は広く平坦面をなしている。

遺物はすべての柱穴掘り形から土師器片を中心として出土しており、そのなかで図示できたのは柱穴イ1内よりの27・28と柱穴イ2の30であった。(第11図)27は口径20.5cmを測る須恵器坏蓋口縁部片で、端部を極端に屈曲させてある。色調は青灰色で胎土・焼成は堅緻。割れ口断面が紫色を呈している。内面には油煙状の痕跡が認められる。28は須恵器有台坏の底部片。低く外展する高台径は8.4cmを測り、断面形が内から外に向けて斜めになるものである。色調は淡灰褐色で、胎土・焼成は砂粒・長石を多く含み、軟質といった印象を与える。高台内には墨書が認められる。判読できる部分は二文字分の「万呂」であるが、その上位にもかすれた墨痕状の箇所があり、本遺跡出土墨書を整理・分類した限りにおいて、「玉万呂」と書かれていた可能性が高い。また、この墨書の左上にも墨痕の部分が確認できるが、別の墨書であるかは不明である。

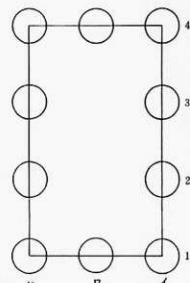
その他の遺物としては、木製品(第30図1)と植物遺体がある。1は柱穴ハ4からの出土で、

第4表 掘立柱建物計測表

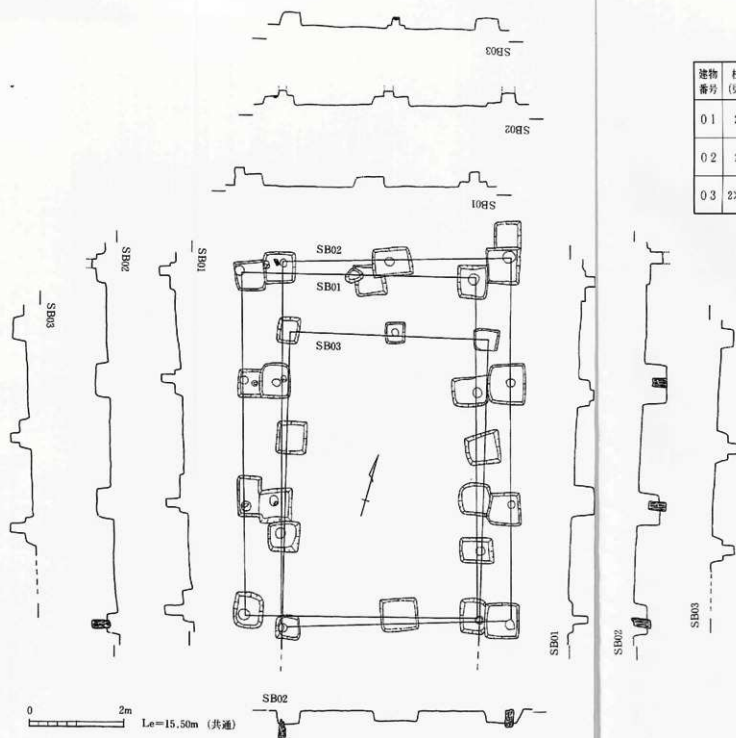
(単位: m)

建物番号	柱間 (梁×桁)	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	桁長	梁長	床面積	方位	掘り方の 形と規模
01	2×3	(2.4)	(2.45)	7.2	4.9	35.28	N-16°-W	方形0.65
02	2×3	(2.53)	(2.4)	7.6	4.8	36.48	N-16°-W	方形0.70
03	2×2以上	(2.1)			4.2		N-14°-W	方形0.45 0.65

()内は概数値



掘立柱建物柱穴概念図



第12図 SB01~03平面及び断面図 (1/80)

最大長 12.8 cm、長軸 6.3 cm、短軸 4.8 cm を測る。板目材で断面長方形を呈し、上端が斜位に面取りされている。植物遺体は柱穴イ 4・ハ 3・ハ 4 から種子を、柱穴ロ 4 から刺状の断片を検出している。同定は行っていないが、種子に関しては大きさ及び先の尖った卵形で表面に深いしわがある点などの形態的特徴からモモの核かと思われる。

SB03

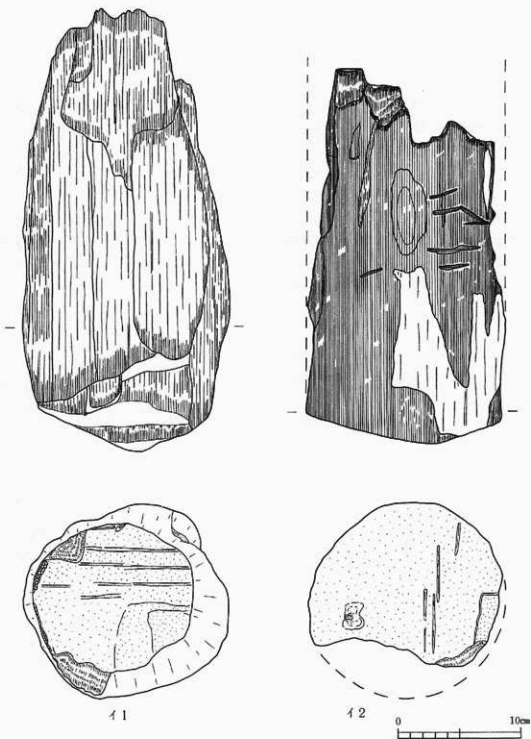
重複し合う SB01・02 の間にさらに割り込む形で SB03 が位置している。SB01 梁行の北側柱列から南に約 120 cm 離れて同じく梁長 4.2 m の北側柱列を検出したが、桁行は北から 2 間分を確認したにとどまった。SB01・02 の建物の主軸が N-16°-W であるのに対し、SB03 は N-14°-W とわずかに北方向へ振っており、梁行は北側柱列で西より 210 cm、210 cm、桁行は東側柱列で北より 230 cm、210 cm、西側柱列で北より 210 cm、210 cm を測る。柱穴掘り形は方形で、大きさは平均して 45×45 cm と 65×65 cm のものがある。現段階では建物全体の規模はわからないが、出土土器の整理から比較的短い期間での建物の移行が判明しており、ほぼ同一地点に主軸規制の働いた 3 棟の建物が建てられている点で判断するならば、SB03 も梁間 2 間（4.2 m）×桁行 3 間（7 m 前後）の南北棟となる可能性が高いと考えられる。

出土遺物はほとんど確認できなかったが、柱穴ロ 4 の柱痕部分の穴底から 15 cm 程度の礎を検出している。

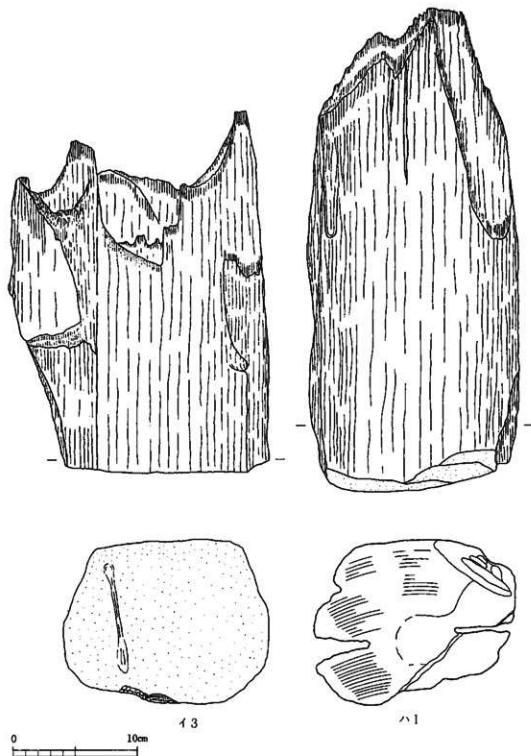
以上、3 棟の掘立柱建物は各柱穴間の切り合い関係及び出土遺物の検討から、SB01→SB02→SB03 の順に変遷をたどっていることが判明している。

(3) 柱列 (SA01・02)

I 5～J 5 区間東端で検出された径 50 cm 前後を測る円形の P1～P4 間及び F4～G4 区間西端の径平均 45 cm を測り、方形を呈する P5～P7 間は、各柱穴が一線に並んでおり、それぞれの主軸方向が N-17°-W と建物の主軸に近似していることから、調査区外で検出できなかった別の建物の一部あるいは板塼となる可能性をもっている。特に P7 からは酸化焙焼成により橙褐色を呈した、内面返りをもつ蓋（第 9 図 11）が出土しており、P5 からさらに柱列が西方向にのびると想定した場合、SB02 梁行北側柱列のライン上の上のっている点も注目される。

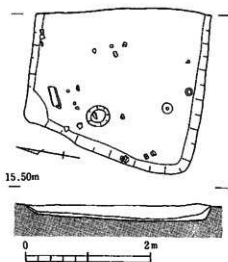


第13図 SBO2柱根実測図1 (1/3)



第14図 SBO2柱根実測図2 (1/3)

(4) 土坑〔SK01〕

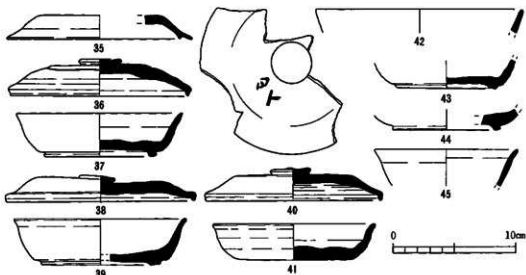


第15図 SK01実測図 (1/60)

G6区内で検出された土坑であり、調査区東側壁面に遺構未検出部分を遮られる形となった。平面プランは判然としないが、南北径280cmを測り、未検出の東西径も同程度か若干長くなると思われる。地面を深さ25cm前後で隅丸形状に掘り下げ、厚さ10~20cmの青灰色粘土を貼り付けて、そのまま壁面としているようである。この粘土及び埋土である暗灰褐色土には全体的に少量の炭化物が混入していたが、焼土面や高温に伴う変色面は認められなかった。

また、土坑内西側部分には径35cm、深さ18cmの円形ピットも検出している。

出土遺物は粘土面で須恵器(第16図)及び長軸39cm、短軸15cmを測る石、ピット内から磁石(第17図)を検出している。



第16図 SK01出土土器実測図 (1/3)

で、つまみ径2.9cm、口径15.1cm、器高1.5cmを測る。以上の3点はいずれも扁平なボタン形つまみをもち、色調が青灰色、胎土・焼成は砂粒・長石を多く含み、堅緻である。

37・39・43・44は有台坏で、全形の知られる37・39から法量差はあるが、口径に対して器高が低く、高台径が大きい扁平な器形を抽出できる。37は高台径8.8cm、口径13.4cm、器高3.5cmを、39は高台径8.2cm、口径14cm、器高3.4cmをそれぞれ測る。37・43の底部外面にはへら切りの渦状痕が明瞭に残っている。色調・胎土・焼成は前述坏蓋と同様であるが、断面内部の酸化層が紫色あるいはクリーム色を呈するものも認められる。41は無台坏で口径13.1cm、底径9cm、器高2.9cmを測り、扁平な器形は先の有台坏に類似している。口縁部内面の一部には墨痕が認められる。

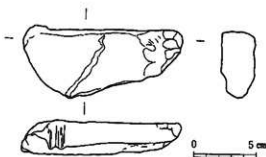
第17図はSK01内ビットから出土した砥石で、平滑な3面に研ぎ面が認められる。なかでも長軸10.5cm、短軸1.5～2cmを測る側面の摩滅が顕著で、短軸方向にくぼみが生じている。

遺構の性格に関しては、ビット内からの砥石や隣接する配石遺構(SX01)内出土のフィゴ羽口(第27図263)などから鍛冶関連の施設といった可能性も指摘できる

が、遺構自体部分的な検出であり不明点が多い。今後の資料の増加をまって総合的な判断を下していきたい。時期は伴出した土器の整理から、SB02と併存していたものと考えられる。

(5) 配石遺構(SX01)

検出された位置はF4～F6区間、調査区北壁際である。(第11図)湧き水対策のためバックホーによって壁際を深く掘り込んだ時に取り上げられた部分が多いが、遺存状態の良好なF5・6区間の拡幅から、約1.5m幅でSK01やSB01～03渠行方向に対応した東西方向に走る帯状の配石であると思われる。その範囲内には径10cm前後の礫や人頭大の石が大半を占めるが、須恵器・土師器片も相当量含んでおり、その他円面硯、フィゴの羽口も1点ずつ出土している。遺構としての確認が遅れたため、出土遺物は一括して掲載していない。また、その時期・性格については不明点が多いが、G6区間で隣接する前述SK01との関係には留意すべきであろう。



第17図 砥石実測図(1/3)

第5章 遺物

第1節 古代の遺物

(1) 須恵器

今回の調査で出土した須恵器の器種には坏・壺・壺・瓶などがあるが、出土量の多い坏・壺は原則的に口縁部現存 1/4 以上のものを実測し、その他の器種を含め現存量がそれ以下のものでも必要に応じて図化した。また、青灰色を呈する須恵器の他に形態や成形技法等は同じであるが、焼成や色調の異なる一群の土器も須恵器として扱っている。

さらに、同じ器種の分類に際しては、巻末の土器観察表に掲載した計測値を基に行った分析(多変量解析)結果等から器形を中心に大きく分類し、胎土観察や調整技法などの特徴から細分化した。

坏壺A類(第7図11、第10図29、第16図35、第18図46~50・52)

内面返りをもち、回転ヘラ削りが施された天井部外面には擬室珠形のつまみがつく一群で、今回確認できた坏壺のなかでは最も古い形態をとる。口径11~15cmの間に分布し、天井部が丸みを帯びたものから口径が大きくなるにつれ扁平化する傾向がみられる。29・46は内面に残る痕から転用碗としての使用が考えられる。

坏壺B1類(第9図19、第10図27、第18図54~64・70~76)

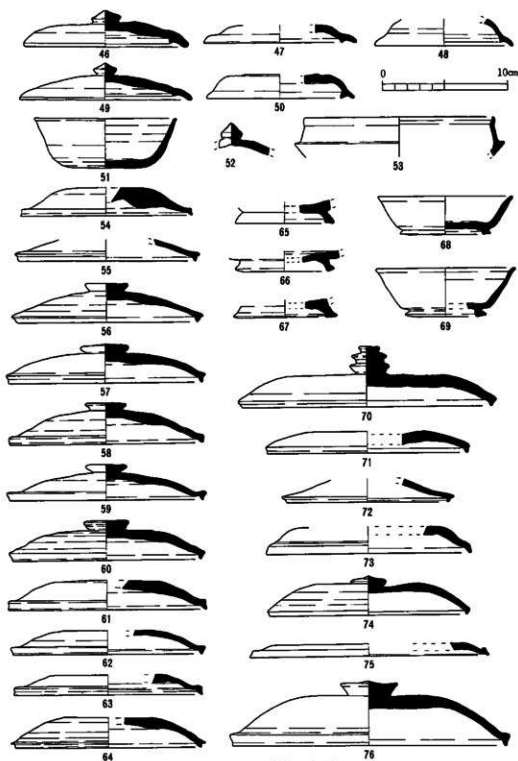
形態的にまとまっており、出土量も多い。器形は天井部からなだらかに口縁部へ移行する笠形と天井部が平坦面をもつ平笠形に分かれるが、ここでは口径分布と胎土によって次の4つに細分した。B1a類(56~64他)のつまみは扁平なボタン形で径3cm前後、器高、口径はそれぞれ2.9~3.2cm、14.6~15.8cmの間に分布し、1/2程度をヘラ削りされた天井部外面には降灰しているものが多い。口縁部は春木3号窯にみられる独特の断面三角形を呈している。色調は青灰色であるが、割れ口断面内部の酸化層はしっとりとしたクリーム色であり、胎土は砂粒を多く含み、長石粒の吹き出しも認められる。B1b類(74)は1点のみの出土で、つま

み径2.8cm、口径15.7cm、器高3.1cmを測る。つまみは擬室珠形で外面には緑色系の降灰を被る。色調は明灰白色で、胎土・焼成は坏壺A類49に近似している。

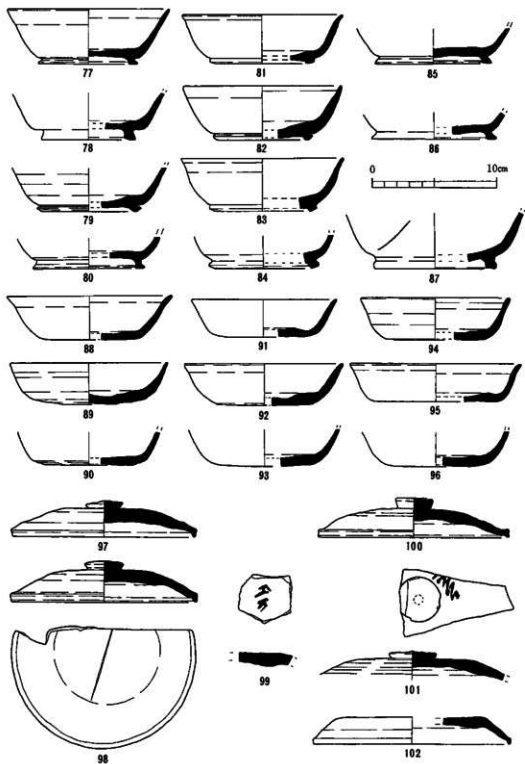
続いてB1c類(73)も1点のみであるが、明らかに胎土・焼成の異なる製品で、棒状の海绵骨片を含み、ボソボソとした質感を与える。口径16.4cmで、図示はしなかったが、同一個体と思われるボタン形のつまみ

第5表 須恵器坏壺・標準得点による分布表

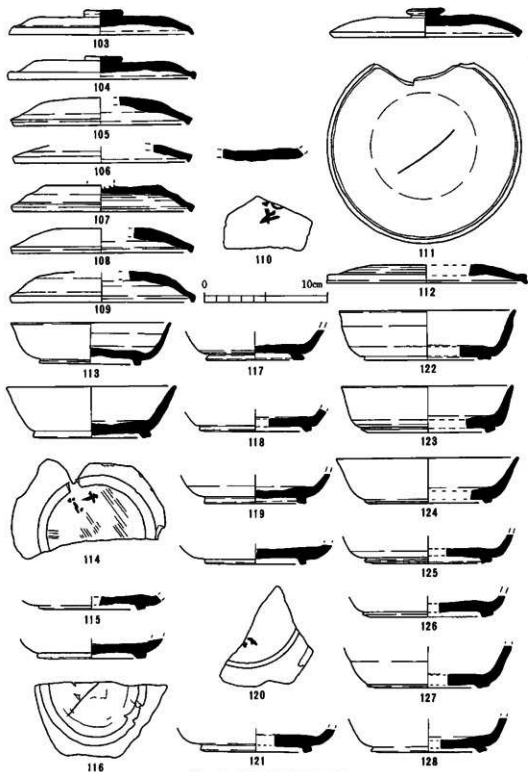
以上	以下	(SS) 0	10	20	30度数
9.889530	10.465100	-3.00:	.	.	0
10.465100	10.940800	-3.70:	.	.	0
10.940800	11.416400	-2.40:***	.	.	3
11.416400	11.892000	-3.10:*	.	.	1
11.892000	12.367600	-1.80:*	.	.	1
12.367600	12.843200	-1.50:***	.	.	10
12.843200	13.318800	-1.20:*****	.	.	8
13.318800	13.794400	-0.90:*****	.	.	10
13.794400	14.270000	-0.60:*****	.	.	16
14.270000	14.745600	-0.30:*****	.	.	26
14.745600	15.221200	0.00:*****	.	.	6
15.221200	15.696800	0.30:*****	.	.	11
15.696800	16.172400	0.60:*****	.	.	2
16.172400	16.648000	0.90:***	.	.	4
16.648000	17.123600	1.20:***	.	.	2
17.123600	17.599200	1.50:***	.	.	1
17.599200	18.074800	1.80:***	.	.	1
18.074800	18.550400	2.10:*	.	.	0
18.550400	19.026000	2.40:*	.	.	1
19.026000	19.501600	2.70:*	.	.	1
19.501600		3.00:*	.	.	1



第18図 須恵器実測図1 (1/3)



第19図 須恵器実測図2 (1/3)



第20図 須恵器実測図3 (1/3)

は径3.2cmを測る。口縁端部の屈曲は緩く、外へ開いている。

B1d類は口径20cm前後に分布しており、口縁端部を極端に屈曲させるもの(27・75)と前出B1a類の大形化した製品(70・76)とにさらに分けられる。特に70のつまみは三段状をなす特殊なもので、下段のつまみ径3.2cm、つまみ高2.3cm、口径20cm、器高4.9cmを測る。76は酸化焰焼成による製品で赤褐色を呈する。口径22cmを測り、盤につくものと思われる。

坏蓋B2類(第7図4・5、第10図26、第16図36・40、第19図97~102、第20図105~109、第21図129・139)

口径は14cm代に集中しており、B1類と同じく出土量が多い。形態的にB1a類の後出と思われるB2a類(4・6・36・40・97・98・100他)の他は全形を知り得る製品がなく、便宜的に口径によってB2b類(129~139他)とB2c類(101・102)に区分した。B2a類はつまみ径3cm前後、器高、口径はそれぞれ2.7~3.2cm、14.1~15.3cmの間に分布し、B1a類からの連続的な推移傾向を示しているが、胎土及び割れ口断面観察ではまとまった特徴をもたない。口縁形態においても端部の屈曲はさほど鋭くはなく、断面もやや丸みをもった三角形となっている。その他の特徴としては、天井部外面に墨書をもつもの(40・129)や内面に墨痕をのこすものが認められる。B2b類は基本的に器高が低く扁平で、口縁端部が外屈する器形であるが、胎土観察では、今回確認できたほとんどのタイプがそろっており、さらに細分化していくと考えられる。B2c類の出土は少ないが、口径16cm前後に分布すると思われる。101は径3.8cmを測るボタン形のつまみをもち、ヘラ削りされた天井部外面の平坦部に墨書をもつ。色調・胎土は割れ口断面も含めて青灰色で精良。

坏蓋C類(第7図6、第16図38、第20図103・104・111・112)

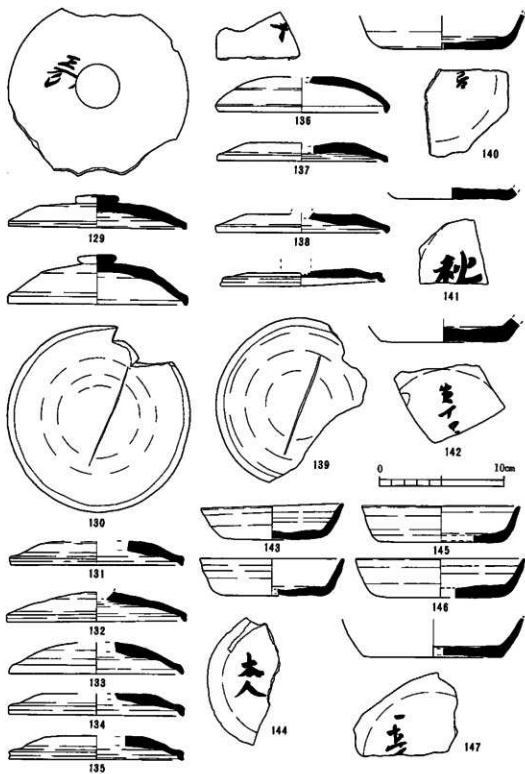
ボタン形のつまみも体部も扁平なタイプで、つまみ径3cm前後、口径14.8~16cm、器高1.8~2.2cmの間に分布している。色調は割れ口断面も含め淡青灰色から青灰色、砂粒・長石を適量含んでおり、焼成は堅緻。

坏蓋D類(第7図1、第22図148~152・155)

擬宝珠形に近いが上面が平坦なボタン形のつまみをもち、口縁端部を短く外屈させるタイプで、口径により二つに分類した。D1類(1・151・152)のうち、全形を知り得る151はつまみ径2.8cm、口径18.1cm、器高3.7cmを測り、内面には部分的ではあるが墨書が認められる。1と152は同一個体と思われ、内面全体に墨痕及び部分的な墨書が残る。いずれも割れ口をみると還元層に挟まれた酸化部分が何層も縞状に凝縮したような断面を呈している。これに対してD2類(148~150・155)は乾いた質感で淡青灰色を呈し、砂粒・長石を多く含むものである。つまみ径2.2~2.8cm、器高2.2~2.9cm、口径13~14cmの間に分布している。また、150・155の内面には確認でき、特に155の場合は「玉万呂」と読める。

坏蓋E類(第7図2・3、第16図40、第22図154・156・157・159~165)

口縁端部を段状に屈曲させ、先端を浅く折り曲げるものと、強く巻き込む感じで内屈させるものがあるが、ここでは口径によって3区分した。E1類(2・3・154・156・157)は口径12cm以下の小形の製品で、転用碗として使用されたものが多いようである。E2類(40・159~164)



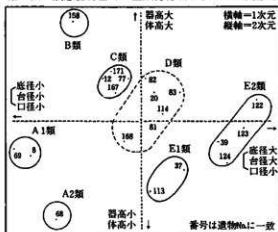
第21図 須恵器実測図4 (1/3)

は口径14~16cmの間に分布するものをまとめたが、全形を知り得るものはない。E3類(165)は口径17.8cmを測り、全面にわたって入念なナデ調整が施されている。

有台坏

第6表は今回図化した有台坏のうち、高台径・底径・口径・高台・体高・器高・角度が計測可能であった20点を分析(主成分分析)し、その結果を2次元散点図としてプロットしたものである。横軸には主な因子である底径・高台径・口径(第1主成分)が、縦軸には体高・器高(第2主成分)が抽出されている⁽³⁾。これに胎土・焼成の特徴などから次の7つに分類した。

第6表 須恵器有台坏・主成分分析による二次元散点



有台坏A類(第7図8、第10図32、第18図68・69)

胎土・焼成ともに堅緻で精良。口径11cm前後、高台径6.6~6.8cm前後に分布する小形の一類。底部外面には入念なナデ調整が施され、外展する断面方形の低い高台がつく。器高差により3.8cm代に分布する8・32・69と3.1cmの68に細分できる。

有台坏B類(第22図158)

1点のみの出土で、口径10.1cm、高台径7cm、器高4.5cmを測る。口径に対して器高の割合が高く、体部角度82度とやや直立気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反し端部を丸く収めている。底部外面には「一」印のへう書きとくすかな墨書が残っている。

有台坏C類(第7図12、第19図77~80、第23図167・171・172)

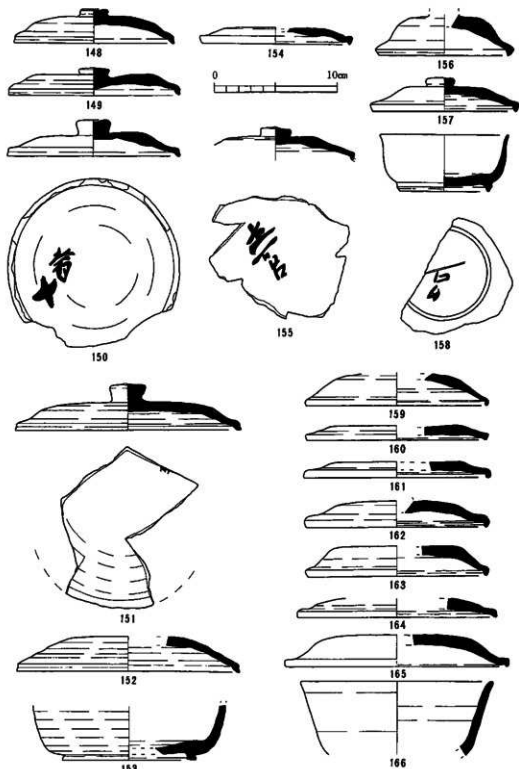
底部と体部との境が丸みを帯びて直線的に立ち上がる器形。口径11.4~13.1cm、高台径6.7~8.1cm、器高3.7~4cmの間に分布する。高台形態や胎土・焼成の違いによって先行的要素をもつC1類(12・77他)と後出的なC2類(167・171他)に分けられる。C1類は砂粒や長石を多く含む胎土で割れ口断面内部の酸化層がクリーム色を呈するものが多い。ふんばりの強い高台の貼り付けや面取りが丁寧でしっかりしている。C2類の体部の立ち上がりはC1類よりもやや強くなっており、167の底部外面には「田地」の田と思われる右側部分の墨書が残存している。

有台坏D類(第9図20、第10図28、第19図81~84、第20図114・115・117・121・127・128、第23図168・173)

底部には高さ4cm前後の外展する高台がつき、口縁部形態にはやや外反するものと直線的に立ち上がる体部からそのまま丸く収まるものがある。口径12.2~13.2cm、高台径8~9.2cm、器高3.3~4cmの間にばらつきをもって分布しており、資料の増加によってさらに細分できるとされる。

有台坏E類(第16図37・39・43、第20図113・116・118・119・122~126)

口径に対して器高が低く、高台径が大きい一群で、今回抽出できた器形のなかでは最も扁平



なものである。器としてのサイズの違いにより、E1類(37・43・113他)とE2類(39・122・124他)に細分される。E1類は口径13cm代、高台径8.5～9.4cm、器高2.9～3.1cmの間に分布する。色調は青灰色系、断面が紫色を呈するものが多く、胎土は砂粒を比較的多く含んで長石の吹き出しも認められる。E2類は口径14cm代、高台径10.2～11cm、器高3.3～3.6cmの間に分布し、E1類よりもひとまわり大きくなっている。

有台環F類 (第18図65～67)

底部のみで全形を知り得るものはないが、高台径7cm代で外に大きくふんばる独特の形態から、ひとつのまとまりとして区分した。つくりは丁寧で、胎土・焼成は前出有台環A類やC1類に類似している。

有台環G類 (第19図85～87、第22図153・166、第23図169・170)

これも断片的な資料の出土でしかないが、高台径10cm代で深身の器形が予想される一群。胎土・焼成の観察などにより、G1類(85～87)とG2類(153・166・169・170)に区分した。G1類は堅緻で胎土も先行的な特徴を示している。G2類も砂粒や長石を含む胎土であるが、軟質といった印象を与えるものが多く、153・169のように腰が張り、口径15.4cmを測る166のように直線的にのびる体部をもつ器形になるとと思われる。

無台環

第7表は今回図化した無台環のうち、底径・口径・器高・角度が計測可能であった17点を分析(主成分分析)し、その結果を2次元散布図としてプロットしたものである。横軸には主な因子である底径・口径・器高(第1主成分)が、縦軸には角度(第2主成分)が抽出されている。これに胎土・焼成の特徴などを加え、次の5つに分類した。

無台環A類 (第18図51)

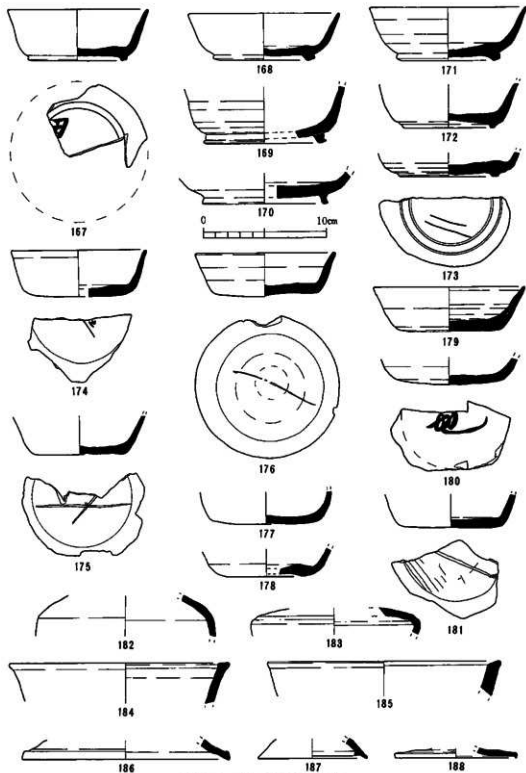
1点のみの出土であるが、抽出できた器形のなかでは口径に対する底径の割合が最も小さく、器高の高い一群が予想される。51は口径11.6cm、底径5.3cm、器高4cmを測る。ヘラ切りの渦状痕を残す底部外面から丸みをもって体部へと移り、直線的にのびる。外面は降灰を被り、内面は明灰白色を呈する。胎土・焼成は砂粒を含むが堅緻で精良である。

無台環B類 (第19図88)

これも1点のみの確認で、最も体部の外傾化が進んだ器形である。88は口径13.3cm、底径6.8cm、器高3.5cmを測り、口径に比してやや小さめの底部から大きく開くように体部が立ち上がり口縁部が外反する。くすんだ灰色を呈しており、胎土には砂粒や長石を多く含む。

第7表 無台環主成分分析による2次元散布





第23図 須恵器実測図6 (1/3)

無台杯C類（第19図89～92・179）

口径11.9～12.9cm、底径6.6～7cm、器高3～3.3cmの間に分布し、底部と体部の境が不明瞭で、丸みをもって立ち上がり、そのまま外傾する器形。色調は割れ口断面も含めて淡青灰色を呈し、胎土は白色砂粒や長石を通有量から多めに含む。

無台杯D類（第7図9、第19図94・96、第21図143・144、第23図174～178・180・181）

口径11～12cmの間に分布しており、器高によってD1類（94・176他）、D2類（9・174他）、D3類（143・144他）に細分した。D1類は器高3.4～3.5cmで細部形態及び胎土・焼成の観察では砂粒や長石を通有量含む共通性はあるが、割れ口断面が紫色を呈し堅緻なものから軟質な感じで黄灰色ないし赤灰色を呈する還元不良のものまで多様性を示す。D2類の胎土も半透明の長石や砂粒を多く含むが、黄灰色を呈するものや焼きの甘いものが多い。器高が3.5～3.6cmとやや高めであり、丸みを帯びた底部から直線的に立ち上がる。D3類は器高2.7～2.9cmの間に分布する低い器形で、胎土・焼成は堅緻で割れ口断面が紫色ないしクリーム色を呈する特徴をもつ。143の内面は底部から口縁部にいたるまで、墨痕が明瞭に残っている転用碗である。また、144の底部外面には判読できない二文字の墨書が書かれている。

無台杯E類（第7図13、第16図41、第19図95、第21図140・145～147）

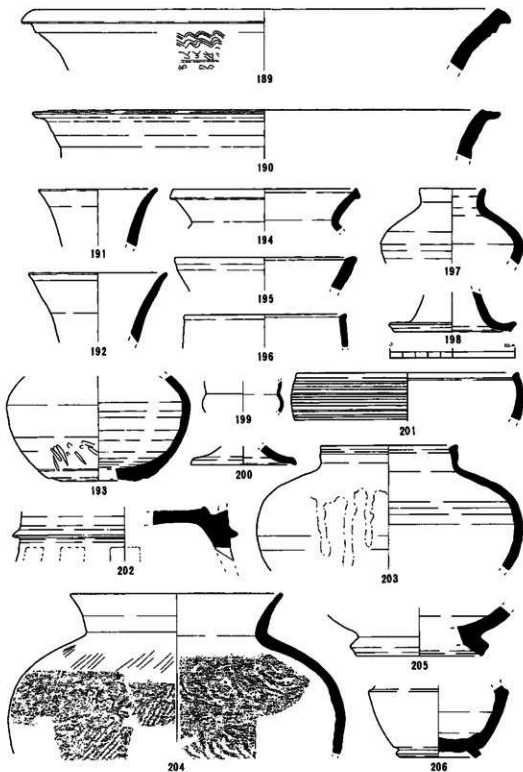
口径（12.2～13.8cm）と底径（9～10cm）との差が他の器形と比して小さく、器高（2.7～3.1cm）が低い一群である。胎土は長石や砂粒を通有量から相当量含む共通性をもつが、堅緻で青灰色～暗青灰色を呈し、口縁端部が外反するものと焼きが軟質で淡青灰色を呈し、直線的にのびるものに分かれるようである。また、底部外面に墨書をもつ個体が一定量認められるのも特徴である。

甕（第24図189・190、第27図264）

局所的な破片が多く、ここでは口縁部片を3点図示した。189は口径37.6cmを測る中形の甕である。外反した口縁端部の内外面をつまみだすように成形されており、その下方に一条の突帯と三条の波状文、さらに凹線と波状文の順に加飾してあるのが認められる。190も口径35cmを測る中形甕で、口縁端部をやや長く外屈させてある。今回出土の須恵器のなかでは量的に少ない海綿骨片を含む胎土が特徴的である。264は口径57cmを測る大形甕で、やや肥厚した幅広い縁帯をなし、内面にも稜をもつ。頸部には波状文が巡っていると思われる。長石を多く含む、割れ口断面がクリーム色の酸化層を呈する特徴をもつ。

壺・瓶類（第23図183～185、第24図191～200・203～206）

壺・瓶も前出甕と同様に口縁から体部へと続く資料が少ない。その中で197・204はそれぞれ口径5.2cm、17cmを測る短頸壺で、肩の張りの弱い球形の体部が復元できる。口径11cmを測る203も短頸の口縁部が立ち上がる壺で、降灰を被った球形の体部下半から、205のように外展し、断面形が内から外へ向け斜めになる高合がつくと思われる。193は不定型な平底で、底側部に削り調整が加えられている。胎土の類似した191・192のような筒状の口頭部を取り付けた長頸壺となる可能性がある。



第24図 須恵器実測図7 (1/3)

その他（第23図 182・183・186～188、第24図 201）

天井部が平坦で、直角気味に折れる口縁部をもつ 183 や扁平な器形で口径 9.6 cm を測る 188 などは壺・瓶類に伴う蓋として扱った。201 は口径 17.4 cm を測る鉄鉢で内湾気味に立ち上がる深い口縁部をもつ。

（2）円面硯（第24図 202）

F 6 区の SX 01 内から出土したもので、小片のため全形を知り得ないが、硯部は復元面径 17 cm 前後を測る有堤式である。台脚部との境に突帯を有し、台側面には長方形の透し孔がいくつか入ると思われる。水平な硯面には墨痕が認められ、海を形成する内堤と外堤では、欠損している外堤の方がやや高くつくられていたものと推定される。色調が青灰色、胎土・焼成は砂粒や長石を含み堅緻で、断面が紫色を呈する点は、本遺跡出土須恵器の先行的要素をもつ一群の特徴と同様である。

（3）土師器

壺（第25・26図）

本遺跡出土土師器の主体をなす壺であるが、そのほとんどが小さな破片であり、全形を知り得るものは少ない。ここでは図化可能であった口縁部の形態及び胎土・調整技法などをもとにして、次の3種に分類して報告する。なお、現段階での大きさの基準として便宜上、口径 15 cm 以下を小形、15～20 cm を中形、20 cm 以上を大形品として扱った。

壺A類（第25図 207～211・213～215、第26図 228～230）

口縁部がくの字状に外反し、そのまま口唇部が丸く収まる一群。胎土に海綿骨片を含むものが多いが、長石や雲母を特徴的に含む個体も一定量認められる。器形としては 213 のように最大径が体部上半にあるものが多いようである。口縁部内外面を横ナデ、体部外面を縦位のハケ目、内面が横位のハケ目調整を施す場合が主流を占めており、大きさは中形のものが多い。

壺B類（第25図 216、第26図 218～224・227）

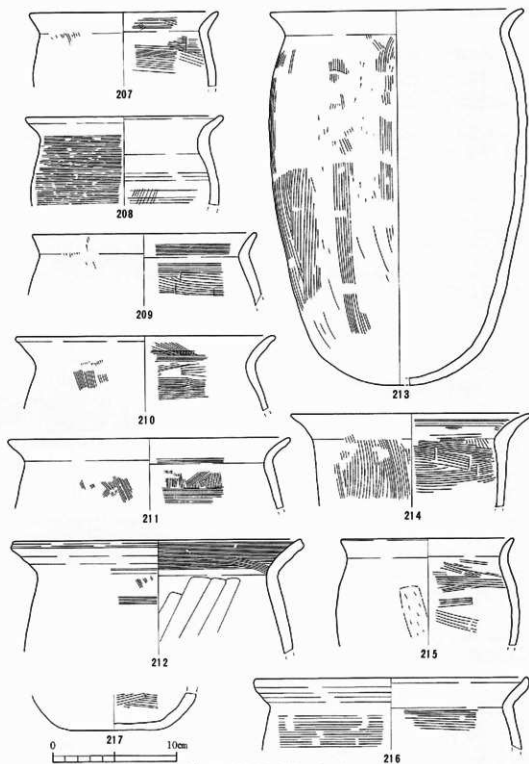
口縁部がくの字状に外反し、口唇部がさらに上方につまみ出される一群で、胎土に雲母、長石を特徴的に含んでいる。口縁部内外面を横ナデ、体部上半をカキ目ないし縦位のハケ目で調整するものが多い。器肉は全体的に薄く、中形と大形に分かれる。

壺C類（第25図 212、第26図 226）

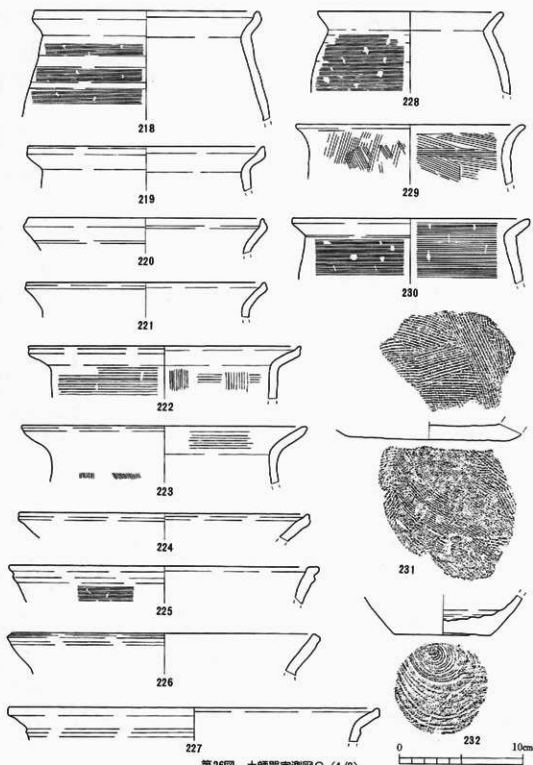
くの字状に外反した口縁から続く口唇部が角ばる形態で、量的には少ない。器肉は厚く、A・B類に顕著であった胎土中の海綿骨片、雲母を含まない。212 は口縁部外面を横ナデ、内面をハケ目、体部外面を横位のハケ目、内面を斜位のヘラなどでつけによる調整が施される大形品である。

黒色赤彩土師器（第27図 233～238・242）

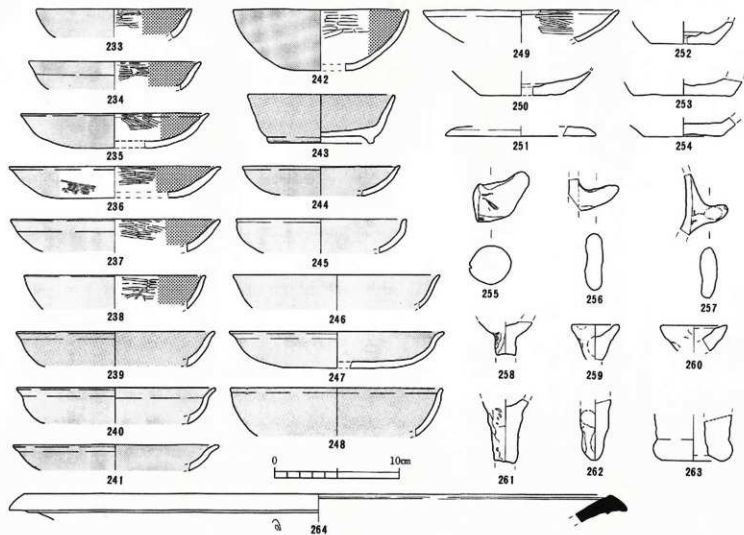
内面を黒色焼酎、外面赤彩を施した土師器で、口径 14 cm を測る碗の他は、皿状に近い形態を示す坏で占められている。いずれも体部内面には横位あるいは斜位のヘラミガキ調整が明瞭に施される。



第25図 土師器実測図1 (1/3)



第26図 土師器実測図2 (1/3)



第27図 土師器実測図3 (1/3)

赤彩土師器（第27図 239～241・243～243）

内外面に赤色顔料を塗布した土師器で、口径11.9cm、高台径8.2cm、器高3.9cmを測る有台坏(243)の他は、口径によって二分される坏であり、黒色赤彩と同様低平な器形をなす。

(4) その他の遺物

製塩土器（第27図 258～262）

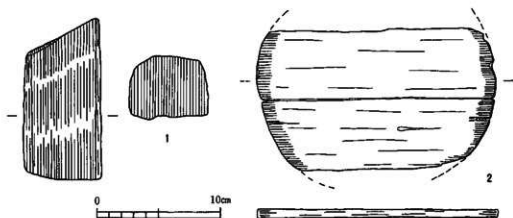
出土点数は少ないが、棒状脚5点が認められる。脚部上位の形態については不明であるが、内外面ともに指頭によるナデとオサエ調整痕が残る。胎土は砂粒や海綿骨片を含んでいる。

フイゴ羽口（第27図 263）

F5区のSX01から出土したもので、全形を知り得る資料ではないが、口径6.5cm前後を測る。外面は高熱のため全体がガラス化している。胎土はワラ状繊維や2mm前後の砂粒を含む粗いものである。現存量45g。

木製品（第28図 2）

J5区包含層から出土した曲物底板の断片で、復元径は18.8cm、厚さ0.7cmを測る。



第28図 木製品実測図 (1/3)

- 註 (1) 浜岡賢太郎・堀嶋井 亮・橋本 澄夫・吉岡 康暢「経堂鳥屋古窯社群の調査」『石川考古学研究会誌』第9号 1975
- (2) 木立雅雄氏の教示により、本遺跡出土品ほど明確な形態を示してはいないが、段状を呈するつまみについては、熊鷹淵跡群・和気横山谷2号窯や加賀市藤原遺跡などに類例が認められることを知った。今後も類例資料の比較等を通じて、本資料の検討を続けて行きたい。
- (3) 第1主成分では、正の絶対値として高台径・底径・口径が順に大きいことから、横軸には器としての径の大小が、同様に第2主成分では、器高・体高の順に絶対値が大きいことから、器の高さが表れていることになる。第1・2主成分までの累積寄与率は約77%であった。
- (4) 第1主成分で正の絶対値が最も大きいのは底径、負の絶対値が大きいのは器高であった。よって横軸には、底径が大きいと器高が低い、あるいはその逆といった器形が表れ、第2主成分では負の絶対値が最も大きい角度によって、縦軸に器形の外傾度の進行が判断できる。

第2節 中世から近世の遺物

今回の調査では、二次的な移動によるものと思われる年代幅の広い土器が一括の状態出土している。ここでは図化できたものを中世と近世に大分し、年代順に報告していきたい。

中 世 (第29図 265、第30図 285～289)

288は底径5.5cm、底厚0.9cmを測るクロコ系土器無台碗の底部片で、外面には回転糸切り痕が認められる。雲母、長石を含む胎土・焼成は良好で、色調は白黄褐色を呈する。11世紀後半から12世紀代の製品と思われる。

265は1点のみ確認できた輸入陶磁器の染付端反り皿。高台はへう削りで、斜めに面が取られている。口径11.4cm、高台径5.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部内外面及び腰部外面には界線が配され、胴部外面に牡丹唐草文、見込には玉取獅子が描かれているようである。コバルトの発色は良好。285は口径56cmを測る珠洲焼の甕。口縁部は玉縁状を呈し、外面には口縁直下から叩き目が横位に施されている。胎土は暗灰色を呈して密である。286も同じく珠洲焼の片口鉢で、口径26cmを測る。口縁部は端面がほぼ水平に面取りされ、直線的に開く体部へと続いている。叩し目は深い。原体幅は確認できない。287は口径8.4cm、底径4cm、器高1.6cmを測る非クロコ系の土器皿。ヨコナデ調整を施された口縁部外面から内面全体にかけてタール状の付着物が認められる。289は底径11cmを測る瓦質の火桶底部片。

以上の製品はいずれも14世紀の後半から15世紀にかけてのものと思われる。

近 世 (第29図 266～284、第30図 290～296)

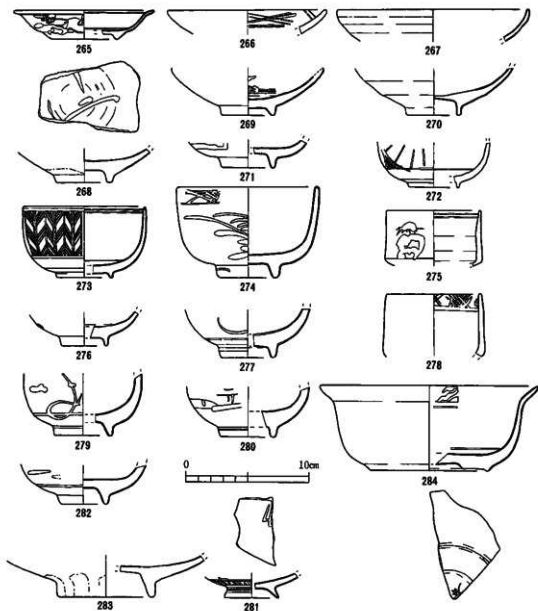
今回出土した近世陶磁器のうち、碗・皿類は肥前系の製品で占められている。図示した271・274・277・279・280・282は陶胎染付碗で、いずれも胎土は灰褐色あるいは黄褐色を呈し、施文は呉須で山水か草花文が描かれているようである。釉調は灰緑色か乳白色で貫入が入る。全形の知られる274は口径11.6cm、高台径4.6cm、器高7.1cmを測り、口縁部外面には斜格子、胴部外面に山水が施文される。272・273・276・281も同じく肥前系染付で、器高の高くない丸茶碗である。いずれも胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈する。文様構成は多様で、273の場合、外面には矢羽根文様が施文され、口縁部内側には大小の二重平行線が施されている。また、見込部分には字銘の一部が観察できる。口径10cm、高台径5.5cm、器高5.7cm。

275・278は半筒形の肥前系染付碗で、どちらも口径7.6cmを測る。なかでも278は外面に青磁釉を、口縁部内面に四方棒文を施す青磁染付碗である。

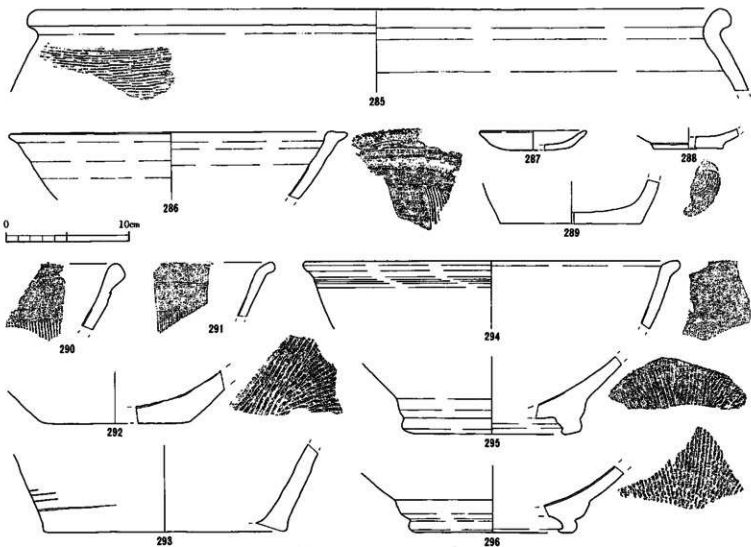
続いて、266～270、283・284は肥前系の皿である。同一個体と思われる266と269は口径13cm、高台径4.4cm、器高3.8cmを測る。胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、割り箸により斜格子が施文されている。見込部分は蛇ノ目軸ハギである。同じく同一固定の267と270は鉄釉により暗茶色を呈し、見込部分はやはり蛇ノ目軸ハギが施されている。口径15.2cm、高台径4.4cm、器高4cm前後で、胎土は明黄褐色を呈する。284は外面に青磁釉を、内面口縁部と見込部分に施文が施されている端反りの青磁染付皿。口径17.4cm、高台径9.8cm、器高6.8cmを測る。胎土は乳白色で精良、高台は中央部を丸く削り込んだ蛇ノ目凹型高台。

290～296 は近世の摺鉢で、越前系の製品と思われる。口縁形態は、そのまま外反させるもの(291)と端部が肥厚し、玉縁状を呈するもの(290・294)とに分かれる。また、底部形態も平底(292・293)と揚げ底の高台(295・296)が認められる。いずれも卸し目は細目で、放射状に引きあげるため、底部内面交差部分が格子目を呈する。胎土は赤茶色で、無軸のものが多いが、口径30cmを測る 294 には鉄軸が施される。

以上の近世陶磁器は18世紀を中心とした年代が考えられる。



第29図 陶磁器実測図1 (1/3)



第30圖 陶磁器実測図2 (1/3)

第6章 調査の成果と課題

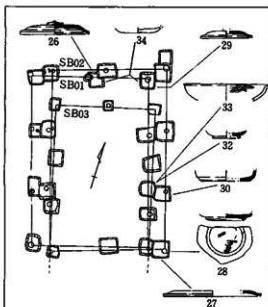
第1節 遺構と遺物の時期

今回の調査で検出できた重複する3棟の掘立柱建物は、主軸規制のうかがわれる配置関係、構造規模の点などから、比較的短期間での建て替えであったと想定される。ここでは建物周辺から多量に出土した遺物のうち、第5章で分類整理した須恵器を傍証資料として建物年代を次の三期に分け、遺跡の変遷を追ってみた。

I期 SB01ではすべての柱穴から小片を中心に遺物が出土している。なかでも柱穴イ2・イ4の掘り方からそれぞれ出土した32、29は本遺跡内での先行的要素をもつ一群、坏蓋A類と有台坏A類に該当するものであり、田嶋編年Ⅱ期、7世紀第4四半期に比定される。続いて、柱穴ロ4の柱痕部分から完形のまま出土した26は建物廃棄の時期を示すものと考えている。柱をすべて抜き取られているSB01の各柱穴には埋め戻された土層が堆積していたが、26はその穴底に正位の状態 で置かれていたもので、柱の抜き取り直後に土器を埋納する行為が想定される。内面に墨痕が残る26は本遺跡の坏蓋B2類で、田嶋編年Ⅲ期に比定されることから、SB01は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期の幅のなかでとらえられる。

この時期に所属する須恵器としては、坏蓋A類・B1類・有台坏A類・C1類・D1類の一部・F類・G1類・無台坏A類・B類・C類・E類の一部があげられる。坏蓋の内面に返りを有するものと、それが消失し口縁端部が独特の断面三角形を呈するものが共存する時期であり、量的に主体をなしているのは春木3号窯に類品を見いだせる坏蓋B1類を中心とした一群である。

II期 SB02からはSB01と同じくすべての柱穴掘り方から小片を中心として遺物が出



第31図 柱穴内土器出土地点図

土しているが、柱痕部分からのものは確認できなかった。柱の抜き取りは完全には行われておらず、4本の柱根が残存していた。

加えて、掘り方部分の出土遺物にはモモを主とした植物遺体も検出されており、SB01とは異なる建物の地蹟及び廃棄状況が認められる。

柱根の残る柱穴イ1掘り方から出土した27（坏蓋B1d類）と「万呂」と読める墨書が記された28（有台坏D類）は田嶋編年でのⅢ期に比定でき、前出26と共存するものである。このことは、SB01からSB02への建て替えがスムーズに執行されたことを物語っている。時期は8世紀第2四半期を中心とする年代幅のなかでとらえていきたい。所属須恵

器には坏蓋B2類・C類・有台坏D類の一部・E類・無台坏D3類・E類がある。

また、SK01もその配置関係と粘土面でまとまって検出された須恵器から同時期に併存したものと見える。

Ⅲ期 SB03からは時期を明確にする遺物の出土はないが、建物廃棄後に調査区内が畑作に関連する畝状遺構（SU01～13）へと変わっている点から、出土須恵器の下限（田嶋編年Ⅳ期）をSB03の廃棄段階ととらえ、8世紀第3四半期のものと考えておきたい。この時期には坏蓋D類・E類・有台坏B類・C2類・D類の一部・G2類・無台坏D1類・D2類の須恵器が該当する。

第2節 墨書土器の概要

本遺跡の性格の一端を示しているものが、22点の墨書土器及びそれに関連する遺物の出土であろう。出土土器全体の個体数や構成比率等の確認は行っていないが、県内他遺跡での墨書土器出土の状況からすれば、非常に狭小な範囲（200㎡弱）にもかかわらず点数は多いといえる。

この傾向が遺跡全体のものであるか、今回検出された建物周辺に限定されるものであるかは現段階では判断できない。さらに、墨書された文字内容に関しても、遺跡の集落構成とその変遷が明らかにされ、時期別あるいは集落内の分布状況を踏まえた上で問われるべきである。

よってここでは、基礎的な資料として第8表に墨書の種類や数量などを示し、資料整理の過程で気付いた点を記して報告としたい。

今回の調査で確認できた墨書土器はすべて須恵器（坏・蓋）であり、記載部位は有台坏・無台坏が底部外面に、坏蓋に関してはⅡ期では外面に記されることが多く、Ⅲ期に入ると内面に移行するようである。

第8表 墨書土器集計表

また、判読できる文字全般の特徴として、複字句がそのほとんどを占める点があげられる。単字句は大きな字体で無台坏底部外面に記載された「秋」が1点であり、その他は二文字以上のものである。Ⅱ期では人名に関わるものと思われる「酒女」や「人」が、Ⅲ期では農耕・祭祀に関する「田地」やその下に吉祥句である「八十」をつけた「田地八十」が認められる。

さらにⅡ期を中心にⅢ期までは男性名と思われる「玉万呂」の出土頻度が高いようである⁽⁵⁾。なお、明確にⅠ期のものと判断できる墨書土器は見いだせなかったが、関連遺物としての円面硯が1点出土しており、

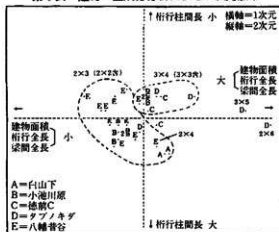
墨書	点 数	蓋		有台坏		無台坏		時期	遺物No.
		外面	内面	底部 外面	底部 内面	底部 外面	底部 内面		
田地	3			1		2		Ⅲ期	(参)2-2 167・180
田地八十	1			1				Ⅲ期	(参)2-3
玉万呂 ・万呂	6	2	1	1		2		Ⅱ～ Ⅲ期	28・100 129・140 147・155
・人	1					1		Ⅱ期	144
秋	1					1		Ⅲ期?	141
酒女	1					1		Ⅱ期	13
(未読・ 二文字)	1	1						Ⅱ期	(参)2-1
(二文字)	1			1				Ⅱ期	20
不明	10	3	3	2		2		Ⅱ～Ⅲ	

型式分類⁽⁶⁾や須恵器との胎土比較によってⅠ期に属するものと考えられる。加えて、図化した須恵器坏・壺173点のなかには墨痕を残すものが30点(内、明瞭な使用痕も認められるもの8点)あり、転用硯としての使用が考えられる。時期はⅠ期からⅢ期まで全般にわたっている。

こうした遺物の出土状況は墨書が遺跡内で記載されたことを物語るものであり、Ⅰ期の墨書土器の出土も今後予想される。

第3節 掘立柱建物の類型

第9表 建物・主成分分析による二次元散布



今回の調査では、ほぼ同一地点で主軸規制のとれた同規模の建物が建て替えられていることから、三期にわたる時期別の変遷を想定できた。この建物間の切り合いをもとにした時期区分と軌を同じくして出土須恵器の様相も特徴的な変化を遂げており、時間的な経緯をよく示しているといえよう。

ここでは数量的補足として、邑知地溝帯内で検出されている掘立柱建物の規格の特徴を分析し、比較することでその性格を探ってみたい。

データを援用した遺跡はいずれも奈良時

代を中心とするもので、かつ「一般集落」の性格とは異なり、類似する構造規模の建物が規則性をもって配置されているものである。データ数は30棟で、内訳は鹿島町徳前C遺跡4棟、七尾市八幡普谷遺跡12棟、七尾市古府タブノキダ遺跡7棟、七尾市小池川原地区遺跡5棟、本遺跡2棟である。入力データは梁間全長・梁間柱間長・桁行全長・桁行柱間長・建物面積・柱穴最大長・建物主軸の7変数、分析方法は主成分分析を用いた。

分析の結果は第9表に二次元散布図としてプロットした。横軸には主な因子である面積・桁行全長・梁間全長が抽出されていることから、建物の規模が表れているものと考えられる。同様に縦軸には主な因子として桁行柱間長が抽出され、構造面が表れているようである。寄与率は第1主成分54.88%、第2主成分19.64%で累積寄与率は約75%であった。

まず、構造的には湯尻修平氏の分類による「中核集落」⁽²¹⁾といった概念で位置づけられている八幡普谷遺跡、官人居宅地の可能性が指摘されている小池川原地区遺跡と本遺跡が2間×3間の柱間間数を主とするのに対し、同じく「中核集落」とされる徳前C遺跡と庇をもつ面積97㎡の大型建物を主屋とし、「官衙的性格を有する集落」⁽²²⁾である古府タブノキダ遺跡では3間×4間の建物が主となっている。

続いて第9表の横軸に表れている建物規模をみると、20㎡前後に分布する八幡普谷遺跡、小池川原地区遺跡と30～40㎡に分布する徳前C遺跡、古府タブノキダ遺跡、本遺跡に分かれるこ

となる。こうした点から判断すると奈良時代の邑知地溝帯内に造営された掘立柱建物のなかで本遺跡SB01・02は構造的に八幡昔谷遺跡、小池川原地区遺跡に近く、規模の点では徳前C遺跡、古府タブノキダ遺跡に近いという独自の形態を取っていたことが読み取れる。

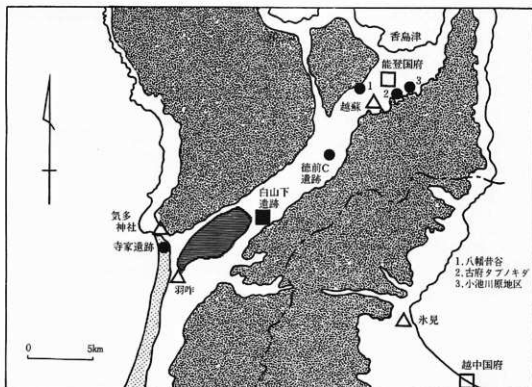
当然のことながら、本遺跡の場合には集落構成の検討作業をめくにした段階でのデータであり、来年度に予定されている第2次調査や数年後のバイパス建設に伴う大規模な調査によってより正確な成果が期待されるものである。

第4節 まとめにかえて

本遺跡周辺が地理的にも歴史的にも重要な場所に位置していることは、第1章で述べたとおりである。今回の調査では、古代の能登郡与木郷域内の集落跡と思われる遺構が検出され、7世紀第4四半期から8世紀第3四半期にかけて営まれたことが判明した。その間、調査区域内では建て替えによる三期の変遷がみられたが、それは総体として律令体制の実施と発展という歴史の流れと決して無縁ではない。

和銅6年(713)と紀年銘が入り、与木という郷名の初見とされる平城宮出土木簡と本遺跡で建物が造営された時期の間に年代的な矛盾はなく、このことは7世紀末より実施された律令体制下での遺跡の成立の妥当性をより証明しているものである。

こうした観点にたてば、遺跡内での三期にわたる変遷は、養老2年(718)に越前国から独立、



第32図 遺跡の位置概念図 (1/290,000)

天正13年(741)に越中国へ併合、天平勝宝9年(757)に再び独立という能登四郡(能登国)の古代におけるやや複雑な動向を反映したものととも理解される。

また、律令体制下での与木郡の姿を伝えるものとして、文献史料に表れる「撰才駅」・「余喜比古神社」があることは前述したとおりであるが、陸路(駅路)及び海路(邑知満)の要所という立地条件を備えた本遺跡の考察には、これら古代施設の存在をめきにするにはできないであろう。

県下で最も古い時期の墨書土器・円面硯・転用硯の出土は、該期の硯使用層と使用の場が特定されていた点を考慮に入れるならば、地方行政区画として機能していた与木郡域内の官人層が使用したものとするのが妥当であろう。また、しっかりとした径70cm前後の方形掘り方をもつ掘立柱建物についても同様の性格付けができる。

現段階では、古代官営施設である「撰才駅」と直接結び付く資料の検出はないが、状況的には駅・神社を含む駅家集落の一部であった可能性も指摘できよう。

ともあれ、本遺跡の調査はまだ端緒についたばかりであり、今後の検討課題は多い。十分な調査体制のなかで、古代の姿を明らかにしていく必要があろう。

- 註 (1) 本遺跡出土須恵器の胎土は、数点を除き全体的に長石を多く含んでいる点の特徴となっていることから、ほとんどの製品が鳥屋窯産とみられる。また、割れ口断面の観察では、大まかにいって、還元層がある程度の厚みをなすが、内部の酸化層がクリーム色を呈し、しっとりとした質感をもつもの、内外面のみが還元層で、内部の酸化層がクリーム色・紫色・赤褐色・縞状を呈するもの、内部まで還元層で灰色・青灰色を呈するものに分かれ、時間的な傾向がうかがわれるようである。本報告ではふれなかったが、今後、胎土を含めた須恵器の検討を期したい。なお、須恵器の年代及び産地の比定に際しては、北野 博司・木立 雅郎・川畑 誠の三氏に実見していただき、指導と助言を得た。記して感謝の意を表したい。
- (2) 田嶋 明人「古代土器編年層の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 金沢市
- (3) 北野 博司「掘立柱建物の柱穴内土器埋納について」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢市
- (4) 浜岡賢太郎・堀井 亮・橋本 澄夫・吉岡 康輔「陸登鳥屋古窯址群の調査」『石川考古学研究会会誌』第9号 1975
- (5) 墨書文字の分類については、以下の文献を参考にした。吉岡 康輔「墨書土器」『東大寺横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983 及び玉口 時雄「墨書土器」『季刊考古学』第18号 雄山閣 1987 東京
- (6) 吉岡 康輔「陶硯」『東大寺横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983
- (7) 集落の性格については、註6文獻・「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」での湯沢 修平氏の分類に準じている。そのなかで、一般集落とは、面積30㎡前後で建物の配置に規則性が見いだせない集落に対して用いられている。
- (8) 湯沢 修平「徳成C遺跡」『鹿島町史』資料編(続) 1982 鹿島町
- (9) 註7文獻による。
- (10) 堀田 修一・宮下 栄仁・橋本 澄夫「七尾市古府タノキダ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター 1983 金沢市
- (11) 遺跡の概要については、平成2年2月28日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第32回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会の発掘調査成果の発表で、掘立柱建物の細かなデータについては、善嶋 直・岡田 雅人両氏の教示による。
- (12) 註7文獻で湯沢氏は、一般集落及び官ガ集落に対する概念規定として使われ、「小地域の郷長クラス」といった用い方もされている。
- (13) 註10文獻による。

第10表 出土土器観察表 1

持出%	器種	器形	調査			胎土	保存状況	測定値											遺跡	備考
			口部	体部	底部			A	B	C	D	E	F	G	H	I				
2-1	須恵器	杯	ナ	ナ	ナ	ヘリ割	M3, L1	I		3.6	2.7							探掘品	調査土器, 2文字不読	
2-2	*	無台杯	*	*	*		SM4	II	3		8.9	12.3			3.0		60	*	* 「田地」	
2-3	*	有台杯	*	*	*		SM3	II	18	7.4	9.9	11.9	0.4		3.1	3.5	71	*	* 「田地八十」	
7-1	*	杯	ナ	ナ	ナ	ヘリ割	SM3	IV		3.4								S U 05 (14)	内面磨面(部分)+磨面 M4 S2と同一器種	
7-2	*	*	*	*	*	*	M4, L1	II	19			8.0	12.2		0.4	1.7	30	S U 04 + 接	内面磨面	
7-3	*	*	*	*	*	*	S3	III	7			12.2				1.5	22	S U 07	内面全特に磨面、 外面磨面	
7-4	*	*	*	*	*	*	SM3	III	6			10.2	14.4		0.8	1.7	25	S U 04 + 接	内面磨面	
7-5	*	*	*	*	*	*	M4	III	4			11.7	15.2		0.4	1.4	32	S U 01	内面磨面	
7-6	*	*	*	*	*	*	SM3	III	2			15.9						S U 01		
7-7	*	無台杯	ナ	ナ	ナ	ヘリ割	S3	I		4.4								S U 01	内面磨面	
7-8	*	有台杯	ナ	ナ	ナ	ナ	M2 L2	I	20 (20)	5.5	6.6	10.8	0.5		3.2	3.7	62	S U 09 + 接	底部外面ナール状の特 特徴	
7-9	*	無台杯	*	*	*	*	SM3 L1	IV	2 (10)		7.0	11.0			3.5		69	S U 01 + 接		
7-10	*	瓶				ヘリ割	SM4	II	(30)	5.8	9.4							S U 01	外面磨面、内面磨面	
7-11	*	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	SM4	III		2.3	1.9	12.0	15.4	0.8	0.5	1.4	27	P7	内面磨面	
7-12	*	有台杯	*	*	*	ナ	ナ	SM4	III	18 (30)	6.6	6.7	12.2	0.3		4.0	4.3	68	P8	
7-13	*	無台杯	*	*	*	*	SM3	II	4 (10)		9.4	12.2			2.7		67	S U 06 + 接	底部外面磨面「漢文」 + ヘラ書「一」	
7-14	*	有台杯	*	*	*	*	SM4	III	(12)	8.3	8.8			0.4				S U 06		
9-15	土師器	高杯	ナ ミギキ	ナ ミギキ	ナ ミギキ	ナ ミギキ	SM3 S2	S2	6			15.6						S U 10	内面黒色、外面赤彩	
9-16	*	瓶	ナ	ナ	ナ	ナ	M2 M3	III	2			17.6	1.7					S U 06		
9-17	*	瓶	ナ	ナ	ナ	ナ	SM4 L2	S3	5			17.6						S U 10 (底部)		
9-18	須恵器	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	SM4	III	4			13.3			1.5	14	S U 10	内面磨面		
9-19	*	*	*	*	*	*	M3	III	10			11.0	14.4		0.8	1.7	24	S U 10		
9-20	*	有台杯	*	*	*	ナ	ナ	SM3 L1	I	23 (30)	8.2	8.8	13.6	0.4		3.8	4.2	68	S U 10	底部外面磨面 2 文字 + ヘラ書「X」
9-21	*	無台杯	*	*	*	*	SM4	III	(3)		10.0							P9		
9-22	*	*	*	*	*	*	M3	IV	(4)		6.0							S B 03		
9-23	*	*	*	*	*	*	S4	III										S U 01	返り	
9-24	土師器	要	ナ	ナ	ナ	ナ	M4 L2	S2	13			19.6	21.7	1.8				S U 10		
9-25	*	*	*	*	ハナ目	ハナ目	M4 L3					22.0						S U 10	上部は横ハナ、 下部は縦ハナ	
10-26	須恵器	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	SM4		実形	3.4	22.9	10.9	14.5	0.9	0.4	1.6	2.5	35	S B 01 (口)	内面磨面、重量220g
10-27	*	*	*	*	*	*	SM4	III	2			20.5						23	S B 02 (口)	内面 磨
10-28	*	有台杯	*	*	ナ	ナ	SM3	III	(10)	8.4	8.8			0.7				S B 02 (口)	底部外面磨面「万呂」 + 磨面	
10-29	*	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	S4	III	8			10.9						S B 01 (口)	外面磨面、内面返り 磨面	
10-30	*	無台杯	*	*	*	*	SM3	III	(15)		10.2								S B 02 (口)	
10-31	*	有台杯	*	*	*	*	SM4	I	(1)	5.0	5.7			0.5					S B 01 (口)	
10-32	*	*	*	*	ナ	ナ	S2 L1	I	(10)	5.2	6.4			0.6					S B 01 (口)	高台内面磨面
10-33	土師器	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	S2		5			18.0							S B 01 (口)	内面黒色、外面赤彩
10-34	*	*	*	*	ヘリ割	ナ	M2 ナ	III	(実)		6.6								S B 01 (口、口)	両面赤彩
10-35	須恵器	杯	ナ	ナ	ナ	ナ	SM3	III	5			9.5	15.0			1.9	42	S K 01	内面返り	
10-36	*	*	*	*	*	*	SM4		実形	3.4	2.8	19.2	14.3	0.5	0.5	1.9	2.9	30	*	内面磨面、重量272g

第11表 出土土器總覽表2

年次	種別	区分	用途		地盤		土質		地盤 状況	基礎 形式	計画										備考	
			用途 区分	用途 名称	地盤 状況	土質	基礎 形式	A			B	C	D	E	F	G	H	I				
1967	河川敷	市街地	ナデ	ナデ	未調査		M4, L2	Ⅰ	12(22)	8.8	9.4	13.4	0.4	3.1	3.5	66	SX00					
1968	*	坪	*	*	ヘラ割		SM4 L2	Ⅲ	18	2.9	2.6	11.5	15.1	0.6	0	1.5	2.1	27	*			
1969	*	有台坪	*	*	*		NQ, L1	Ⅱ	7(10)	8.2	10.6	14.0	0.3	3.4	3.7	70	*	*				
1970	*	坪	*	*	ヘラ割		SM4	Ⅲ	8	3.2	2.9	11.4	14.1	0.6	2.1	2.7	22	*	外周道路、不陸、内庭整備			
1971	*	無台坪	*	*	ナデ		NQ, L1	Ⅰ	10(12)	9.0	13.1			2.9	70	*	*	作部内庭整備?				
1972	*	*	*	*	*		SM4	Ⅲ	1		16.6						*					
1973	*	有台坪			ナデ	ヘラ切 未調査	M4 L1	Ⅰ	(18)	8.0	8.6			0.3			*					
1974	*	*	*	*	*		SM3	Ⅲ	(5)	8.7	8.9			0.4			*					
1975	*	*	* ナデ	*	*		M3	Ⅲ	1			11.6					*					
1976	*	坪	*	*	ナデ ヘラ割	ヘラ割	M3	Ⅰ	14	2.3	2.0	13.5	13.0	1.1	0.7	1.1	2.9	22	14区	内庭返り、駐車		
1977	*	*	*	*	*		M3	Ⅱ	7			12.4			0.7			35	SX01(F3)	*	外周路戻	
1978	*	*	*	*	ナデ		M2	Ⅲ	6			11.0						60	15区	*		
1979	*	*	*	*	ナデ ヘラ割	ヘラ割	M2	Ⅰ	16	1.8	1.4	11.0	14.0	1.0	1.0	1.0	3.0	16	SX01(F4)	*	外周路戻	
1980	*	*	*	*	*		M2	Ⅲ	6		10.0	12.0		1.3	0.6			55	H6区	*	*	
1981	*	無台坪	*	* ナデ	ヘラ割		S3, M3	Ⅱ	18(12)	5.3	11.6			4.0				70	F5-G4E 接			
1982	*	坪	*	*	ヘラ割		M2	Ⅲ		1.6	1.3			1.1					F6区	内庭返り?		
1983	*	無台坪	ナデ	ナデ	ナデ		M2	Ⅲ														
1984	*	坪	*	*	ヘラ割		SM4	Ⅰ	11			9.0	12.9		0.5	1.7		33	SX01(F3)	外周路戻、続きふくれ		
1985	*	*	*	*	ヘラ割 ーナデ		S3 M2	Ⅰ	2			8.5	14.3			1.6		18	H5区			
1986	*	*	*	*	*		M3	Ⅰ	6	3.4	2.8	9.0	14.6	0.6	0.6	1.9	3.1	22	G4区	外周二次道路		
1987	*	*	*	*	*		S3, M3	S4	Ⅰ	2	3.8	3.1	10.0	15.5	0.6	0.5	2.0	2.1	21	G3-G4E 接合		
1988	*	*	*	*	*		SM4	Ⅰ	3	3.2	2.7	9.9	15.5	0.6	0.7	1.9	3.3	26	H6区	外周路戻		
1989	*	*	*	*	*		M4 L3	Ⅰ	2	3.2	2.1	10.3	15.5	0.7	0.7	1.5	2.9	27	F6-G5E 接合	内周路戻		
1990	*	*	*	*	*		SM4 L2	Ⅰ	10	3.6	2.9	10.3	15.1	0.8	0.4	2.0	3.2	30	F4区	*		
1991	*	*	*	*	*		S4 M3	Ⅰ	6		(10)	15.8		0.8	2.0			25	F6区	外周路戻、内周ヘラ割 「—」		
1992	*	*	*	*	*		SM4 L1	Ⅲ	5			10.1	15.2		0.3	1.6		27	G6-H4E 接合	内周路戻		
1993	*	*	*	*	*		S4, M3	Ⅰ	4			15.2			1.6			25	15区	外周路戻、内庭整備		
1994	*	*	*	*	ヘラ割		S3 M1,3	Ⅱ	12			9.8	14.8		0.5	2.1		28	F5区			
1995	*	有台坪	*	* ナデ	*		M3	S2	1	(3)	7.8	6.6			0.8				F5区			
1996	*	*	*	*	*		M4	Ⅰ	(6)	6.9	8.2			1.0					G5区			
1997	*	*	*	*	*		S3	Ⅰ	(8)	7.5				0.7					C5区			
1998	*	* ナデ	*	*	*		NQ, L1	Ⅰ	6(12)	6.0	6.8	10.7	0.3		2.8	3.1	60	H5区				
1999	*	*	*	*	*		S2	Ⅰ	10(10)	5.0	6.8	11.1	0.6		3.2	3.8	58	H5区				
2000	*	坪	*	*	ヘラ割		SM3 L1	Ⅰ		3.2	2.4	12.6	30.0	2.3	0	2.6	4.8	25	第11トレンチ			
2001	*	*	*	*	*		SM4	Ⅰ	7			19.8	16.0			1.7		17	第6トレンチ	外周路戻		
2002	*	*	*	*	*		M3	Ⅱ	4			12.9						25	15区	*		
2003	*	*	*	*	ヘラ割	M2	S4 M3	Ⅱ	1			13.7	16.4			1.5			40	F4-G3E 接合		
2004	*	*	*	*	*		S3	Ⅱ	17	2.8	2.0	15.7	6.8	0	2.3	3.1	31	SX01(F6)	外周路戻			
2005	*	*	*	*	*		SM4	Ⅰ	2			19.1			0.8	2.5		35	G5区			
2006	*	*	*	*	ヘラ割		SM4	Ⅱ	7	4.5	3.3	18.0	22.0	1.2	1.7	2.3	5.2	35	F4-5、G4-6 接合			
2007	*	有台坪	*	* ナデ	*		NQ, L1	Ⅲ		7.9	8.0	13.1	0.5		3.9	4.4	62	G5区				

第12表 出土土器観察表3

年代	器種	器形	調査			出土			保存 (24)	計									調査 出土地点	備考				
			口部	体部	底	海陸	非海陸	陸		A	B	C	D	E	F	G	H	I						
19-76	須恵器	有台杯	ナ	ナ	ナ			M4	1	161	7.4	8.5		0.8							F5K			
19-79	*	*	*	*	*	ナ			M3	1	122	7.6	8.0		0.5							SX01(F5)		
19-80	*	*	*	*	*	*			S3	S2	111	8.9	8.6		0.7							F-G5区接合		
19-82	*	*	*	*	*	*			M4	1	3	7.1	8.6		13.1	0.3	3.6	2.9	08			H5K		
19-82	*	*	*	*	*	*			M4	1	1214	7.5	8.3		12.9	0.4	3.9	4.3	70			G5K		
19-83	*	*	*	*	*	*			M4, L1	1	131	7.8	8.7		13.2	0.2	4.0	4.2	09			F5K		
19-84	*	*	*	*	*	*			M4	1	141	7.9	8.5		0.5							G5K		
19-85	*	*	*	*	*	ナ			M4	1	152	9.3	8.7		0.6							G5K		
19-86	*	*	*	*	*	*			M3	1	110	9.8	9.2		0.5							H4K	底付部に口部部の一 部破損	
19-87	*	*	*	*	*	*			M3	1	151	9.5	9.7		0.8							H4K	底部外周へ「フ」 痕跡?	
19-88	*	有台杯	ナ	ナ	*	*			M3	1	4110	6.8	13.3				3.5		56			F5K		
19-89	*	*	*	*	*	*			M4, L1	1	5102	6.6	12.6				3.3		60			地倉部一 SX01(F6)		
19-90	*	*	*	*	*	*			S3, M2	1	161	7.0												
19-91	*	*	ナ	ナ	*	*			S3, L1	1	317	6.6	11.5				3.0		62	*				
19-92	*	*	*	*	*	*			S3, M3	1	6114	7.0	12.9				3.3		64	G5-6区 地				
19-93	*	*	*	*	*	*			S3, M3	1	71	7.2										H5K		
19-94	*	*	ナ	ナ	*	*			M4, L1	1	2122	7.8	11.9				3.4		69			H4K		
19-95	*	*	*	*	*	*			S4	1	2131	10.0	13.8				3.0		68			H5K		
19-96	*	*	*	*	*	*			M4	1	71	7.4										F5K		
19-97	*	坪蓋	ナ	ナ	*	ヘラ割 ナ			S3, M4	1	11	3.6	2.5	9.5	14.6	0.7	0.4	1.8	2.9	23			G5K	外周破損
19-98	*	*	*	*	*	*			M3	S1	14	3.1	2.8	10.1	14.8	0.7	0.6	1.9	3.2	29			H5K	内周へ「フ」 痕跡
19-99	*	*	*	*	*	*			S3, M4	1	1													
19-100	*	*	*	*	*	*			S3, M4	1	14	2.9	2.5	10.6	15.3	0.9	0.6	1.7	3.2	24			F4K	内周破損、ヘラ割キ
19-101	*	*	*	*	*	*			S3, M3	1	1	3.8	3.4	10.9		0.6				24	G5-6区接合			
19-102	*	*	*	*	*	割ナ			M4, L1	1	5			15.8				2.2		40	H-14区接合			
20-103	*	*	*	*	*	ヘラ割			M4, L1	1	5	3.1	3.1	12.3	15.0	0.5	0.4	1.0	1.9	25	F-G4区接合			
20-104	*	*	*	*	*	*			S3, M4	1	10	3.0	2.8	11.6	15.1	0.6		1.2	1.8	30			G4K	
20-105	*	*	*	*	*	*			S3, M4	1	4				14.1			2.2		31	F-G6区接合			内周破損
20-106	*	*	*	*	*	*			M3	M2	1	4				14.1				20			H4K	
20-107	*	*	*	*	*	*			S3, M4	1	5				14.4			2.1		34	H3-5区接合			外周破損
20-108	*	*	*	*	*	*			S3, M3	1	3			14.5		1.7			25			G5K		
20-109	*	*	*	*	*	割ナ			M4, L1	1	3			14.7					37			H4K		
20-110	*	有台杯			*	*			S3	1	1													
20-111	*	坪蓋	ナ	ナ	ナ	ヘラ割			S3, M4	1	20	3.1	2.2	9.0	14.8	0.5	0.2	1.5	2.2	21			F5K	底部外周部、部分的 不没
20-112	*	*	*	*	*	*			M3	1	1			16.0			1.3		18			G5K	内周へ「フ」 痕跡	
20-113	*	有台杯	*	*	ナ	ナ			M4, L1	1	5102	8.1	8.5		12.9	0.4	2.9	3.3	67			SX01(F6)		
20-114	*	*	*	*	*	*			S3, L1	1	2122	9.4	9.2		13.5	0.5	3.5	4.0	66			F5K	底部外周部、不没	
20-115	*	*	*	*	*	*			S3, L1	1	171	7.6	9.0			0.3								
20-116	*	*	*	*	*	*			M3	1	132	7.4	8.8			0.5							F4-G5区接合	底部外周へ「フ」 痕跡
20-117	*	*	*	*	*	*			M4, L1	1	132	7.8	8.1			0.5							F4-S区接合	
20-118	*	*	*	*	*	*			M3	1	181	8.3	8.6			0.4							G4K	
20-119	*	*	*	*	*	*			S4, M3	1	161	8.1	8.5			0.5							H5K	
20-120	*	*	*	*	*	*			M3	1	161	7.4	9.0			0	0.4						G6-H15-J4 地	底部外周部、部分的 不没
20-121	*	*	*	*	*	*			M3	S2	1	191	8.0	9.8			0.5						H3K	
20-122	*	*	ナ	ナ	*	*			M3	1	1131	9.8	10.5		14.0	0.3	3.6	3.9	79			F5K		
20-123	*	*	*	*	*	*			M4, L1	S2	1	10171	9.5	11.0		13.8	0.4	3.3	3.7	76			F4-S区接合	
20-124	*	*	*	*	*	*			M3	1	3171	9.2	10.2		14.6	0.3	3.3	3.6	65			H5K	底部外周へ「フ」 痕跡	
20-125	*	*	*	*	*	*			M3	S3	1	141	8.8	10.9		0.5							G4K	

第13表 出土土器観察表4

発掘年	区画	形状	土器		保存数 (/24)	計											遺構 出土地点	備考			
			口部	体部		A	B	C	D	E	F	G	H	I							
20-126	遺器部	有台付		ナ デ	M4	1	(12)	9.1	10.2				9.4					G4区			
20-127	*	*	ナ	デ	M4	1	(7)	8.2	9.8				9.3					14区	底部外周部破		
20-128	*	*	*	*	S3, M2	1	(9)	8.1	9.0				9.4					14区	*		
20-129	*	16 区	ナ	デ	ヘラ削	SM4 L2	IV		3.4	3.2	14.4	9.7		2.0	2.7			第10トレンチ	外周部「玉万内」?		
20-130	*	*	*	*	S1	SM4 L3	II	21	3.1	2.3	9.3	14.5	0.7	0.7	2.4	3.8	37	13区	内周へラき「一」 外周部片破		
20-131	*	*	*	*		SM4	II	6				13.8					29	13区	内周部破		
20-132	*	*	*	*	ヘラ削	ML L1	III	14			7.3	14.2		0.5	1.8		23	F5-4区接合			
20-133	*	*	*	*		SM3 L2	II	7			8.6	13.8		0.6	1.9		28	14区			
20-134	*	*	*	*	ナデ?	SM4	III	4				14.0			1.7		27	H5区	内周部破		
20-135	*	*	*	*		S4, M2	II	4				14.0			1.9		26	H4区	外周部破, 内周部破		
20-136	*	*	*	*	ナデ	M3	II	2				13.6					34	H5-4区接合	外周部破?		
20-137	*	*	*	*	ナデ?	SM4	IV	8				13.7			1.5		24	F4-5区接合	外周部破		
20-138	*	*	*	*		SM4 L1	IV	4				13.8			1.5		15	第7トレンチ	*		
20-139	*	*	*	*	ヘラ削	M4	III	12				8.5	13.0	0		1.1	18	15区	外周部破, 内周へラき 「一」 破りゆがみ		
20-140	*	無台付	*	ナ	デ	SM3	III	(4)	9.5									F6区	底部外周部破・万内 部分		
20-141	*	*	*	*		SM3	II	(6)	8.0									15区	「一」		
20-142	*	*	*	*		SM3	I	(7)	9.6									第7トレンチ	底部外周部破・不没		
20-143	*	*	ナ	デ	*	ML L1	II	20(実)	7.8		11.6			2.7			67	H-15区接合	内周部破		
20-144	*	*	*	*		SM3	I	7(10)	8.0		11.7				2.9			71	14区	底部外周部破・2文字 「口入」	
20-145	*	*	*	*		M3	IV	3(2)	9.6		12.6				2.9			73	H4区		
20-146	*	*	*	*		M4	I	1(12)	10.0		13.5				3.1			70	13-4区接合		
20-147	*	*	*	*		SM3	III		10.4										第10トレンチ	底部外周部破「玉」	
20-148	*	16 区	*	*		SM4	III	4	2.2	2.5	13.0	9.6		2.1	2.7	36	H4, 13-4区 接合	内周部破			
20-149	*	*	*	*		ML L3	III	6	2.4	2.1	13.9	9.6		1.6	2.2	32	F4-G4接合				
20-150	*	*	*	*	ヘラ削	SM4 L1	III	16	2.8	2.4	9.0	14.0	1.2		1.7	2.9	31	G6区	内周部破, 底部・不没 「一」		
20-151	*	*	*	*		M3 L1	IV	3	2.8	2.4	12.0	18.1	1.5	0.3	1.9	3, 7, 35	H5-J4区接合	内周部破・部分的			
20-152	*	*	*	*	(残破)	M4	IV	2			13.3	18.0		0.8	1.8		29	J-13-4区 接合	内周部破		
20-153	*	有台付	*	ナ	デ	M4	S2	I	(4)	10.7	10.5		0.4					C5区			
20-154	*	16 区	ナ	デ	ヘラ削	M4	I	4			8.2	12.0		0.1	1.2		22	G5区			
20-155	*	*	*	*		ML L2	III		2.4	2.4		12.4	6.8				22	J-1区接合	内周部破「玉万内」		
20-156	*	*	*	*		ML L1	IV	6				7.4	10.1		0.6	2.4		58	C5区	外周部破, 内周部破	
20-157	*	*	*	*		M3 L3	III	18	2.2	2.1		11.4	9.7		2.0	2.7	25	H-J3-4-5 区接合	外周部破, 内周部破・ 使用痕?		
20-158	*	有台付	*	ナ	デ	M3	III	1(15)	7.0	7.5		10.1	9.7		3.8	4.5	62	H6区	底部外周部破・不没		
20-159	*	16 区	*	*	ヘラ削	SM4 L2	II	5				9.8	14.4		0.5	2.1		38	H6区		
20-160	*	*	*	*		SM4	III	7				8.0	14.6			1.2		18	G4区	内周へラき「一」?の 一部遺存	
20-161	*	*	*	*		M3	S3	IV	2			11.0	15.0	0.2		1.0		19	14区		
20-162	*	*	*	*		SM4 L2	S3	IV	5				9.6	14.4		0.3	1.8	31	G3-4-5区 接合		
20-163	*	*	*	*		SM4 L1	IV	4				10.9	14.2			2.2		43	F4区		

第14表 出土土器觀察表5

H096	区	種	形	調			土			現存量 (t/2)	計								通	備	注
				口部	体	底	海綿	色紙	砂		雲母	断面	A	B	C	D	E	F			
22-164	須賀	16	面	ナ	ナ	ナ	ヘウ		S4 M3	■	4		12.3	16.0		1.5	22	C区			
22-165	*	*	*	*	*	*	ナ		S4 M3	■	10			17.8		2.5	36	C区			
22-166	*	*	有台16	ナ	ナ	*	*		S4	■	6			15.4			71	H区			
23-167	*	*	*	*	*	*	ナ	ナ	M3 L1	■	1	4(7)	8.0	8.1	11.4	0.4	3.7	4.1	72	C-13-4-J5 陸	外部外装壁「田」
23-168	*	*	*	*	*	*	*		S4 M3	■	115	7.3	8.0	12.2	0.4	3.3	3.7	69	I3-S,H5陸		
23-169	*	*	*	*	*	*	ナ ヘウ		M3 L2	■	(9)	9.1	10.0		0.5					F区	
23-170	*	*	*	*	*	*	ナ	ナ	S4 M3	■	129	10.0	10.3		0.6					H区	
23-171	*	*	*	ナ	ナ	*	*		M4 L1	■	1(9)	7.3	8.0	12.5	0.6	3.7	4.3	70	G・H4区 陸	口部から外部にかけ置 換、底部外装へラフ	
23-172	*	*	*	*	*	*	*		M3 S3	■	1	(9)	7.2	7.8		0.4				C・H4区陸合	
23-173	*	*	*	*	*	*	*		M3 L1	■	12	7.6	8.9		0.3					H4-S,15陸	外部外装へラフ「二」
23-174	*	*	無台17	ナ	ナ	*	*		S2 L1	■	110	6.8		11.0		3.6	74	G5-G区	*	「一」	
23-175	*	*	*	*	*	*	*		SM4	■	110	6.8								H4-L4陸合	* 「X」
23-176	*	*	*	ナ	ナ	*	*		S3 L2	■	22	10.0	8.2	11.3		3.4	70	G・H4区	*	「一」	
23-177	*	*	*	*	*	*	*		M3	■	(7)	8.0								I4-S区陸合	
23-178	*	*	*	*	*	*	*		M3 L1	■	11	10.1	7.0							H5-I4区陸合	
23-179	*	*	*	ナ	ナ	*	*		M4	■	210	7.1	12.0			3.5	65	I4区			
23-180	*	*	*	*	*	*	*		M3	■		8.4								第6トレンチ	外部外装壁「地」
23-181	*	*	*	*	*	*	*		M2	■	111	7.6								I3区	外部外装へラフ「一」
23-182	*	*	*	*	*	*	*		S3	■										H5区	外装陸合
23-183	*	*	*	*	*	*	*		S3 M2	■			43.9							G5区	
23-184	*	*	ナ	ナ	*	*	*		M3	■	4			16.8						J4区	
23-185	*	*	*	*	*	*	*		SM3	■	2									G5区	
23-186	*	*	高坪	*	*	*	ナ	ナ	SM4 L2	■	4			16.8						F4-G5区陸	
23-187	*	*	蓋	ナ	ナ	ナ	ナ		M3	■	1			8.6						H6区	
23-188	*	*	*	*	*	*	*		S2	■	2			7.6						H5区	
24-189	*	*	壁	*	*	*	*		SM4	■	1			37.6						F5区	排水文
24-190	*	*	*	*	*	*	*		S4 M2	■	1			36.0						H4区	外装陸
24-191	*	*	壁	*	*	*	*		SM3	■	3			9.6						I5区	内外装陸合
24-192	*	*	*	*	*	*	*		SM3	■	4			11.2						I3区	*
24-193	*	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ		SM4	■	1		6.0	14.8						H5区	外装及び内部内装陸合
24-194	*	*	蓋	ナ	ナ	*	*		M3	■	2			15.8						H5区	
24-195	*	*	*	*	*	*	*		M3	■	3			14.6						H6-I3区陸	口部部内外装陸合
24-196	*	*	*	*	*	*	*		SM4	■	4			13.2						F6区	
24-197	*	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ		SM3 L1	■	6			11.3	5.2					F4区	
24-198	*	*	*	ナ	ナ	*	*		SM4	■	14		9.2							F6区	
24-199	*	*	*	ナ	ナ	M3	*		S2	■	1									H6区	
24-200	*	*	*	ナ	ナ	S3	*		S3	■	(5)	8.6								H4区	
24-201	*	*	鉄 脚	ナ	ナ	ナ	ナ		SM3	■	4			17.4						F5区	
24-202	*	*	内装壁	ナ	ナ	ナ	ナ		SM3	■										SX01 (F6)	
24-203	*	*	蓋	ナ	ナ	ナ	ナ		SM4	■	2			21.3	11.0					I4区	外装陸合
24-204	*	*	明り目 文	ナ	ナ	ナ	ナ		SM4 L2	■	4			27.2	17.0					C5-H5-G 陸	外装、口部内装陸合、 内部内装明り目
24-205	*	*	壁	ナ	ナ	ナ	ナ		SM4	■	15	10.1	9.8		0.8					I3-G区	外部内装陸合
24-206	*	*	蓋	ナ	ナ	ナ	ナ		SM3	■		6.0	6.8		0.5					静土中	
25-207	土師	壁	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	S3	SM4	■	6			15.2	1.7					G6区	内装壁付合

第15表 出土土器観察表6

持出No.	器 種	形 式	装 飾			土 質			保存量 (/24)	測 量									通 観 出土地点	備 考
			口縁部	体 部	底 部	海綿 色付	赤 色付	青 色付		A	B	C	D	E	F	G	H	I		
25-208	土師器	壺	ナ	ナ	ナ	S2	SM	L1	7			15.1	15.9	1.5					F6区	
25-209	*	*	*	ハケ目 ハケ目		S3	S1	SM4	3			18.1	1.9						G6区	内面磨付青
25-210	*	*	ナ	ナ	ナ	M4	M3	SM4	2			21.0	2.5						F6区	
25-211	*	*	ナ	ナ	ナ	M3	M2	SM4	3			22.8	2.0						H5区	
25-212	*	*	ナ	ナ	ナ			SM4	S2	7		23.3	2.6						G4区	内面磨付青
25-213	*	*	ナ	ナ	ナ	S3	M4 L2	S3	18	2.6	20.5	20.1	1.9	28.0		29.9			F5-6区 横	
25-214	*	*	ナ	ナ	ナ	S3	S2	S3 L1	S2	4		19.0	2.0						H5区	
25-215	*	*	ナ	ナ	ナ	S2	S1	M4	S2	10		13.6	1.5						G6区	
25-216	*	*	*	ナ	ナ	S2	M4	L3	S2	4		21.8	1.9						I4区	
25-217	*	*		ナ	ナ	S3	S2	M4			7.9								G6区	
26-218	*	*	ナ	ナ	ナ		M3	S3	3			18.1	2.1						G4区	
26-219	*	*	*	*	*		M3	S3	3			19.2	1.9						F6区	外面磨付青
26-220	*	*	*	*	*		M3	S2	3			19.0							H4区	
26-221	*	*	*	*	*		M4	L1	S2	3		19.2							J5区	
26-222	*	*	*	ナ	ナ		M3	S3	5			22.0	1.5						J5区	
26-223	*	*	ナ	ナ	ナ		SM4	S2	4			23.0	2.2						F5-6区 横	外面磨付青
26-224	*	*	ナ	ナ	ナ		M3	S2	2			23.4							J4区	
26-225	*	*	ナ	ナ	ナ		M1	S2	2			25.0							H4区	
26-226	*	*	ナ	ナ	ナ	S2	M1	M3	S2	2		24.4							I4区	
26-227	*	*	*	ナ	ナ		M4	L3	S2	2		30.0							J5区	
26-228	*	*	ナ	ナ	ナ		S4 M2	S3	4			14.9	1.5						I3区	
26-229	*	*	ナ	ナ	ナ		S3	S4	4			18.3	2.1						G4区	
26-230	*	*	ナ	ナ	ナ		M1	M3	S2	5		19.0	1.5						I3-4区	
26-231	*	*	ナ	ナ	ナ	S3	S2	SM3		(9)	13.0								H4区	
26-232	*	*	ナ	ナ	ナ		M3 L1	S2	(実)	7.7									H5区	
27-233	*	16	ナ	ナ	ナ	S2	S2		2			12.6							I3区	内面無色外面赤彩
27-234	*	*	*	*	*	S2	S2		2			14.0							F5区	*
27-235	*	*	*	ナ	ナ	S2	S2		6			15.2							H5区	*
27-236	*	*	*	ナ	ナ	S2	S2		4			17.0							G6区	*
27-237	*	*	*	ナ	ナ	S2	S2		2			17.0							I5区	
27-238	*	*	*	ナ	ナ	S2	S2		3			14.6							J5区	*

第16表 出土土器觀察表7

[illegible]

観察表中、〔調整〕については、各部位外面、内面の順に記入した。分記していない場合は内外面共通の調整手法であることを表している。

〔胎土〕は海綿骨片・赤褐色粒・雲母・石英・長石・岩石粒の形状、大きさ、含有量を裸眼で観察した。そのうち、石英・長石・岩石粒などは、ほとんどの土器が共通の傾向を示していたので、表中では砂粒として表記した。量は主観的にみて、通有量と思われるものを判断基準に3とし、以下5：非常に多い・4：多い・2：少ない・1：非常に少ないと表記した。また、断面とは、須恵器のみに行ったもので、安里 進「須恵器の断面色層と六世紀の焼成技術」『考古学研究』を参考に、酸化焰焼成によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、還元焰焼成によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層をⅠ類、内外表面のみ還元層で、内部は全面的に酸化層が残るものをⅡ類、還元層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをⅢ類、内外表面から芯まで完全に還元層のものをⅣ類、その他変則的な色層をなすものをⅤ類として分類、表記した。

〔現存量〕については、基本的に口縁部の残存率を24分割法で、さらに状況に応じて（ ）内に

底部の残存を表した

【計測値】については、A：高台径、B：底径、C：口縁部ヨコナデ幅の直径あるいは体部最大径、D：口径、E：口縁部ヨコナデ幅あるいは口縁部高、F：Eに対する体部下半の高さ、G：体高、H：器高、I：体部の最も張り出した所から口唇部端へ直線を引いて計測した角度をそれぞれ表記した。

圖 版



遺跡周辺の航空写真(昭和22年撮影)



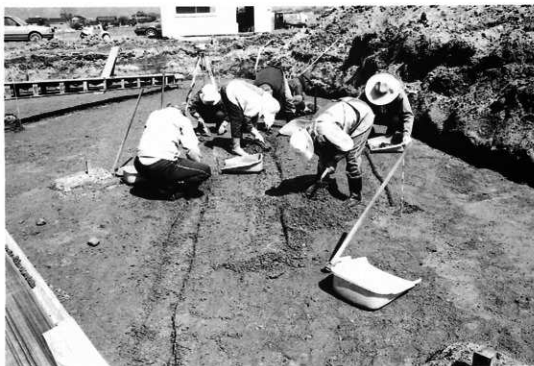
(1)遺跡遠景(北から)



(2)バックホーによる荒掘り(東から)



(1)調査風景(南から)



(2)畝状溝掘り下げ作業(南から)



(1掘りあがった欽伏溝(北から)



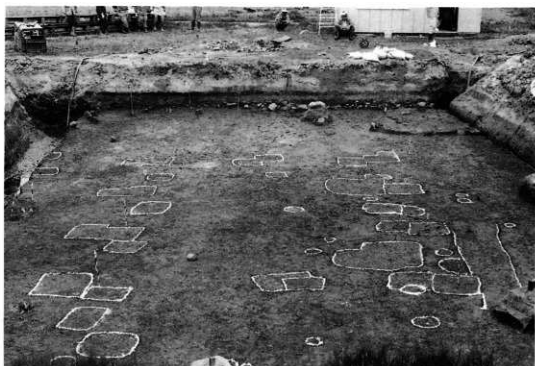
(2掘りあがった欽伏溝(南から)



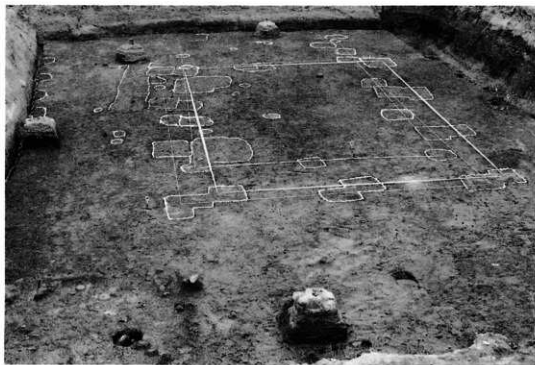
①掘りあがったSU10(南から)



②SU10内土器検出状況(東から)



(1調査区全体遺構検出状況(南から))



(2調査区全体遺構検出状況(北から))



(1)掘りあがった調査区全景(南から)



(2)掘りあがった調査区全景(北から)



(1) 掘りあがったSB01～03(東から)



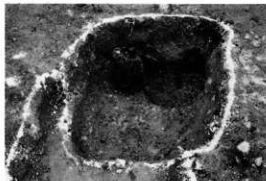
(2) SB01・02柱穴切り合い状況(北から)



(1) 柱根が残る柱列(北から)



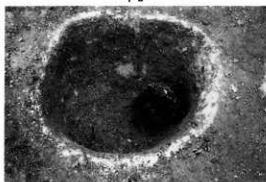
イ 1



イ 2



イ 3



ハ 1

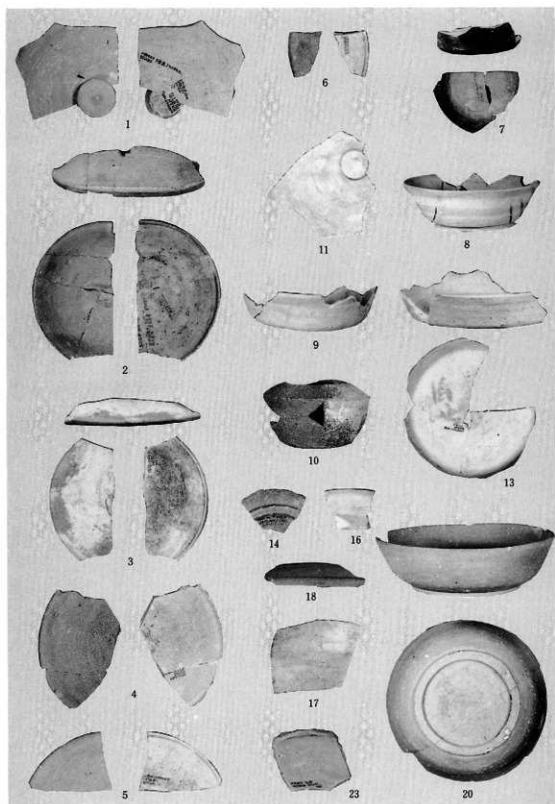
(2) 柱根検出状況(南から)



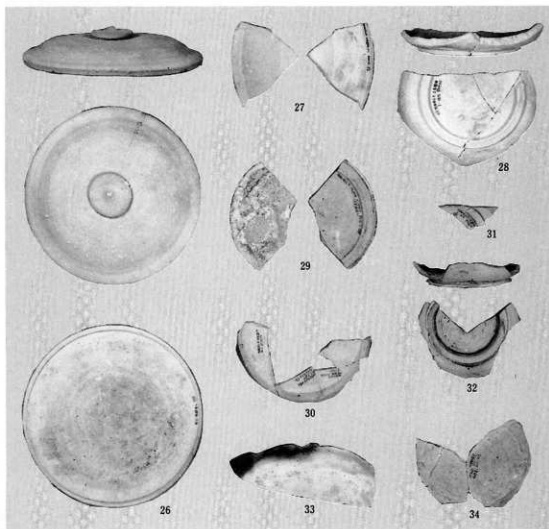
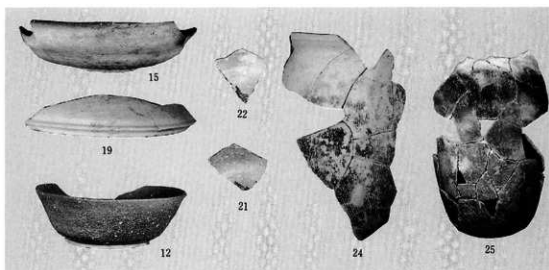
(1) SK01・SX01検出状況(南から)



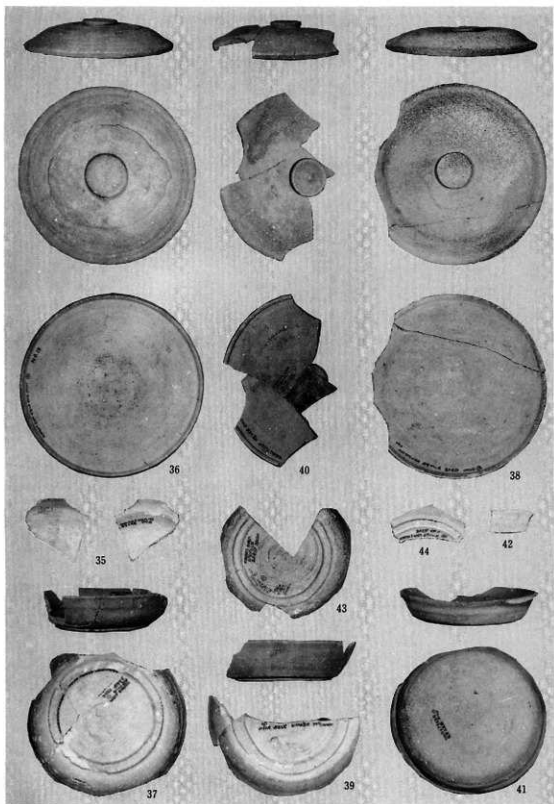
(2) 掘りあがったSK01(北から)



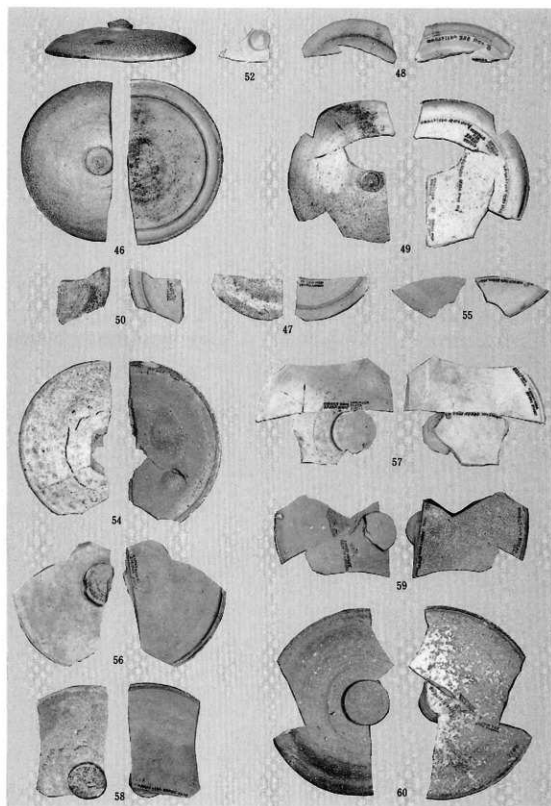
SU01~13出土土器(第7・9図)



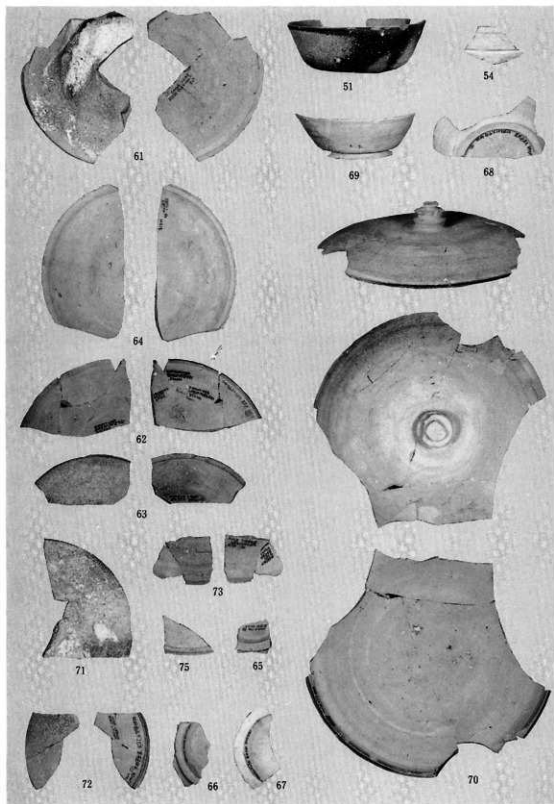
SU01~13出土土器(上-第9图)、SB01·02柱穴内出土土器(下-第10图)



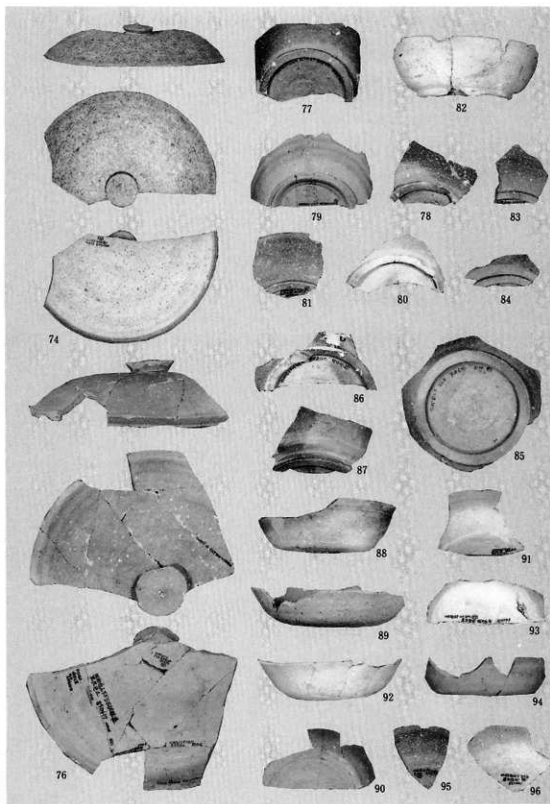
SK01出土土器 (第16図)



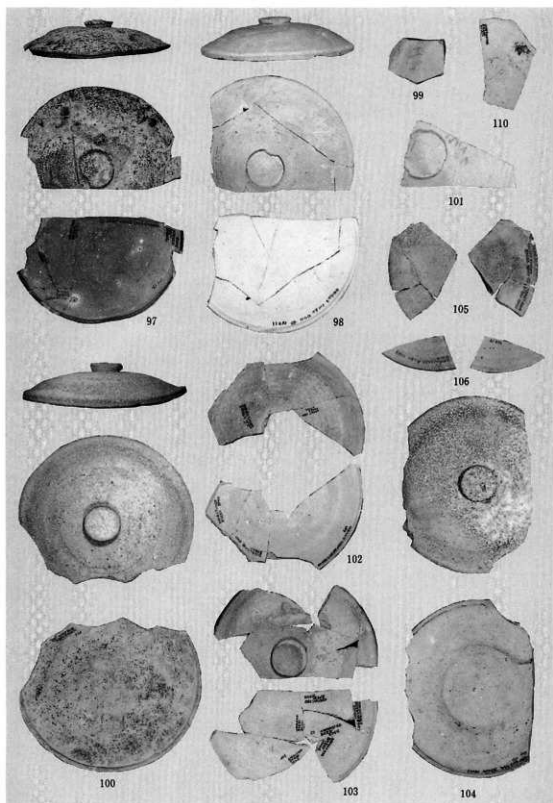
須恵器(第18図)



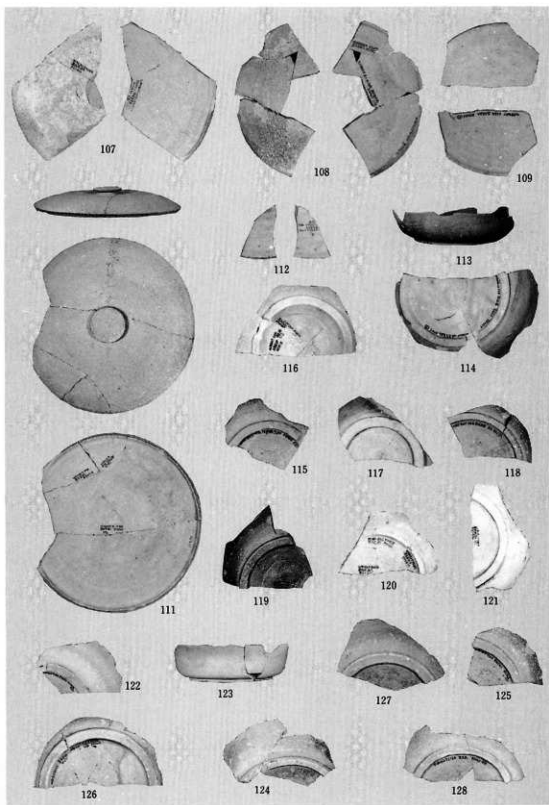
須惠器(第18圖)



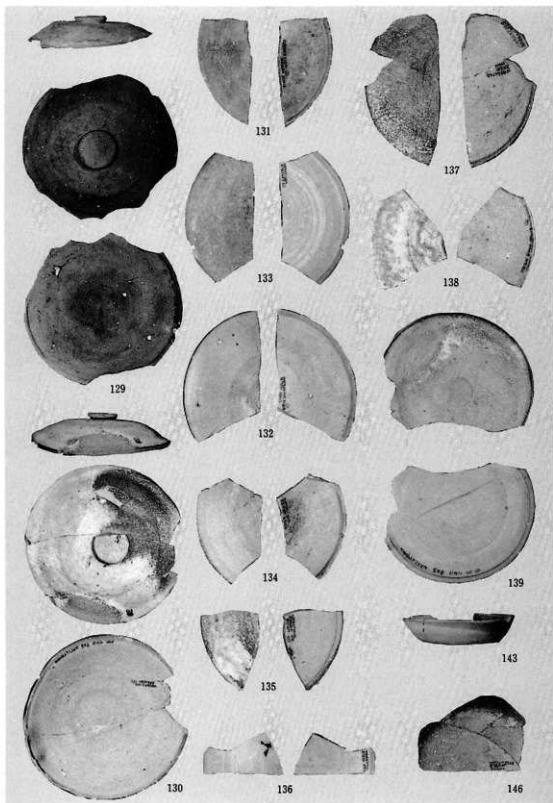
須惠器(第18・19図)



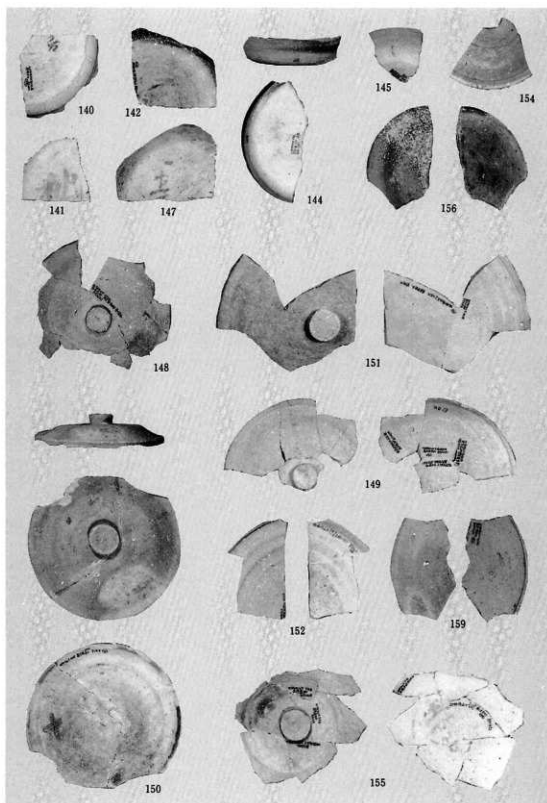
須恵器(第19・20図)



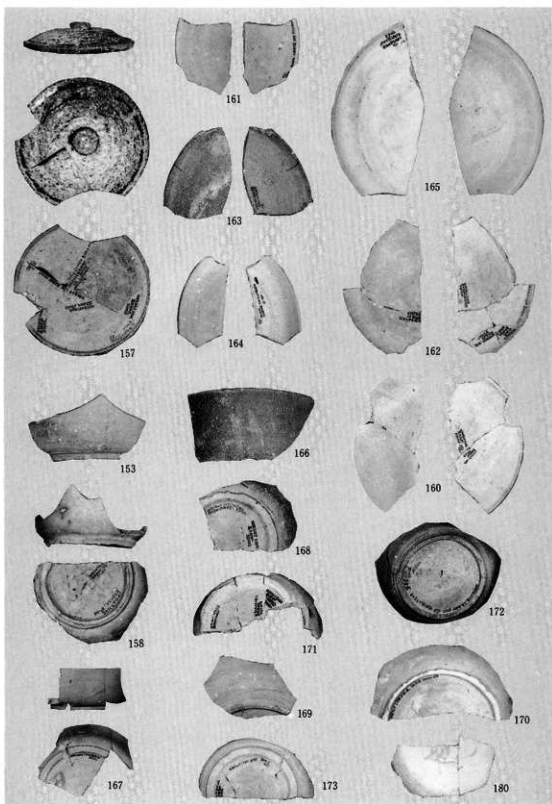
須惠器(第20図)



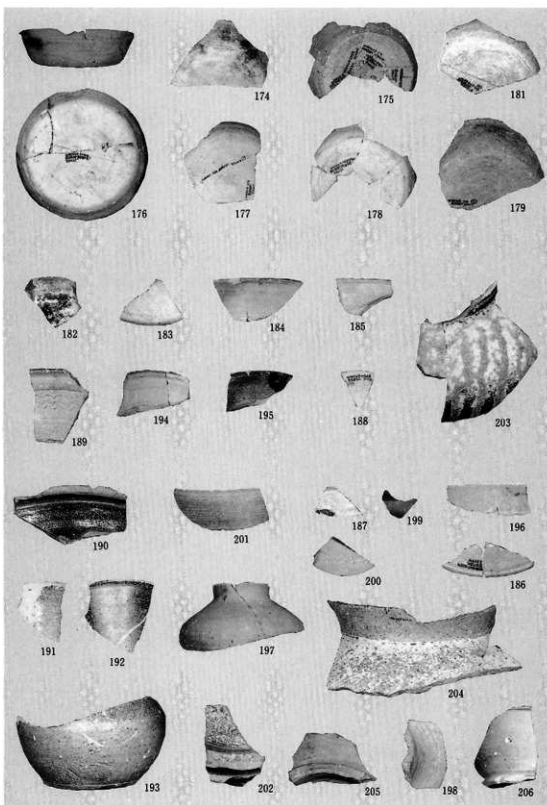
須恵器(第21図)



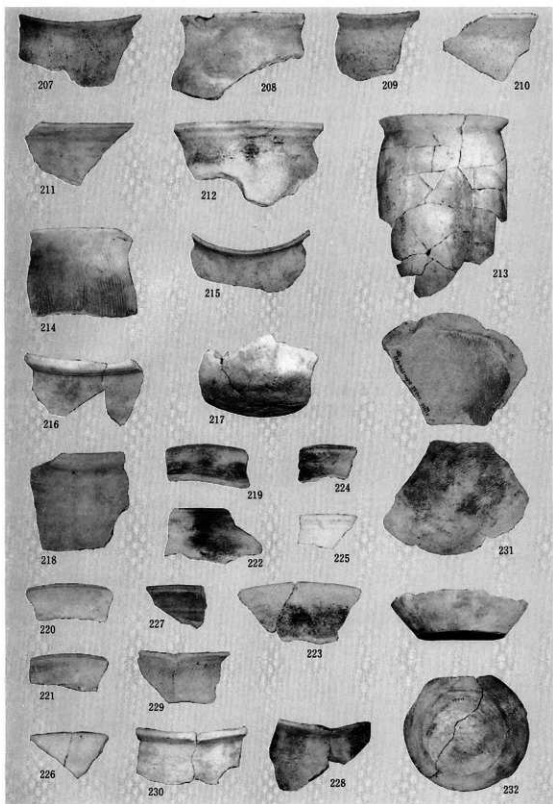
須惠器(第21・22例)



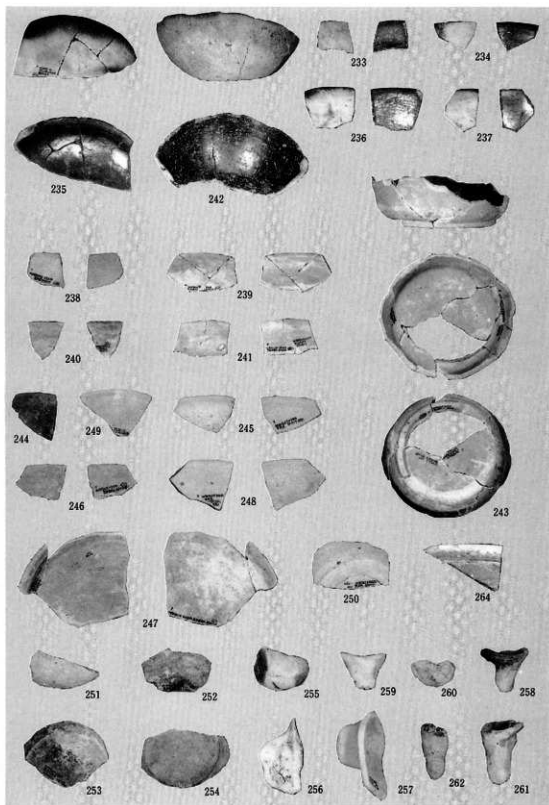
須惠器(第22・23図)



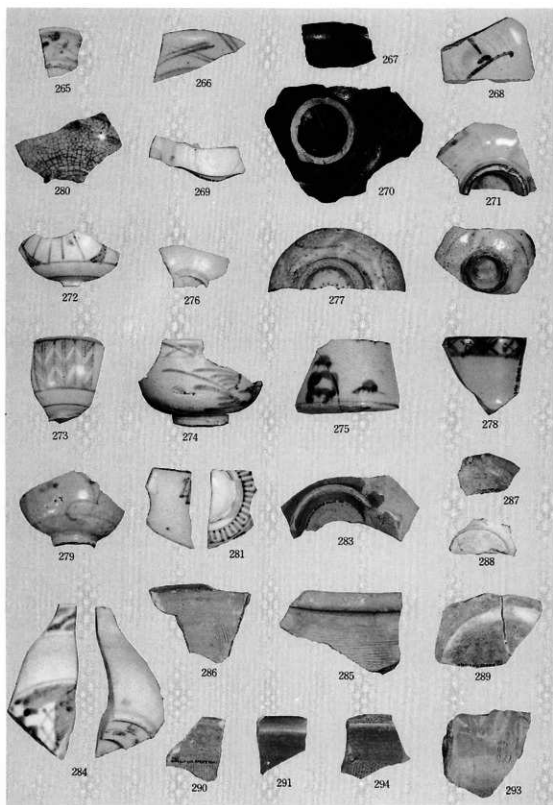
須惠器(第23・24圖)



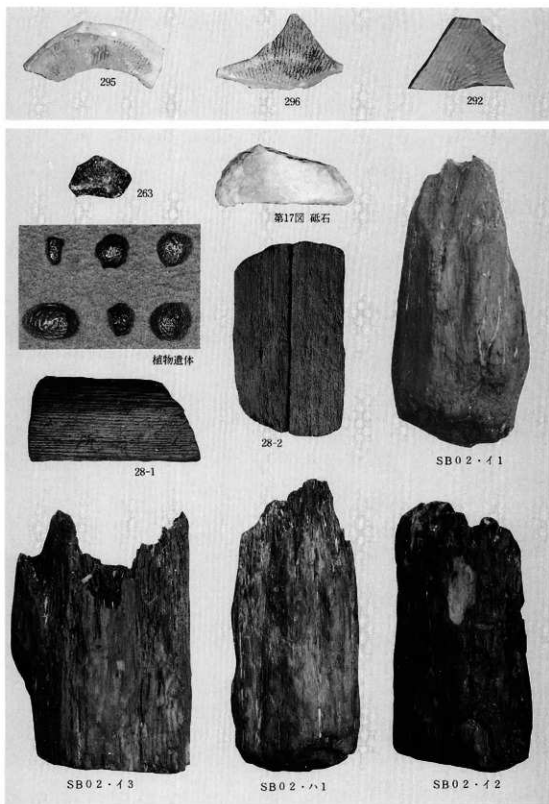
土師器(第25・26図)



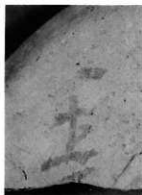
土師器(第27図)



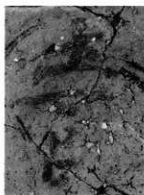
陶磁器(第29・30図)



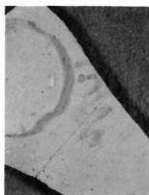
陶磁器(上-第30図)、その他の遺物(第13・14・17・27・28図)



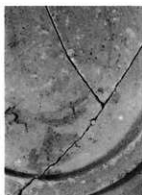
147



155



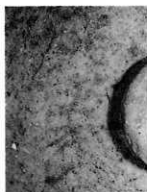
101



28



140



129



99



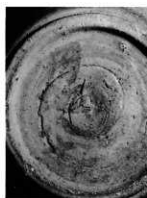
136



150



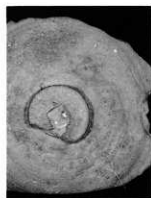
142



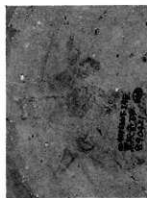
(参)2-3



(参)2-2



(参)2-1



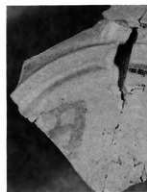
144



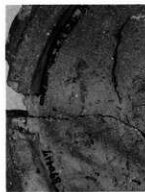
20



13



167



114



141



180



110



【調査参加者】

坂井 俊次	坂井 晶子	宮田 光男	宮田ときの	松柳 清枝	上田 正則
初谷 昌美	藤田 清	松島よしの	島田きよの	國田吉次郎	(以上、四柳町)
今井 勇	浜田 養	木前 明光	浜田 穰	大島とみ子	(以上、大町)
北井よし子	砂田さわ子	(以上、酒井町)			

四柳白山下遺跡 I

発行日 平成2年3月31日
 発行者 羽咋市教育委員会
 羽咋市旭町ア-200番地
 印刷所 北陸コロタイプ印刷
 羽咋郡志雄町子浦甲60
